

五百城文哉《東照宮・備明門(部分)》1894-1905年頃 当館蔵

誕生 文哉 160年 記念

# 放文 菴哉

小杉放電記念日光美術館



2023 12.2 SATURDAY  
2024 1.28 SUNDAY

- [主催] 公益財団法人 小杉放電記念日光美術館 / 日光市 / 日光市教育委員会
- [休館日] 毎週月曜日(1月1~3日は特別開館。1月8日祝日は開館し、1月9日を休館)  
年末休館 12月29日~31日 年始休館 1月4日~6日
- [開館時間] 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)
- [料金] 一般730(650)円、大学生510(460)円、高校生以下無料

※( )内は20名以上の団体割引料金※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料※第3日曜日「家庭の日」(12月17日,1月21日)は、大学生以下無料※日光市民は一般300円、大学生200円、高校生以下無料



www.khmoan.jp

〒321-1431 栃木県日光市山内2388-3  
TEL.0288-50-1200 FAX.0288-50-1201



THE 160TH ANNIVERSARY OF BIRTH OF FOKI BUNSAI - BUNSAI AND HOAN

小杉未龍《放電》神橋(部分) 1901年頃 当館蔵



## ごあいさつ

五百城文哉(1863-1906)は、水戸藩士の家に生まれ、高橋由一に洋画を学んだ後、晩年を日光で送った、洋画黎明期に活動した画家の一人です。日光では幼い小杉放菴に絵を教え、放菴はこの師のことをずっと大切に想っていました。近年、牧野富太郎からも認められたという植物学の知識に基づく、高山植物を中心とする精細な植物画で、五百城の人気は高まっているようです。

一方で、五百城が日光で残した仕事として、「土産絵」の存在を忘れるわけにはいきません。1890年代後半から1900年代にかけて、日光や横浜で外国人旅行客向けに、日本の風景・風俗を描いた水彩画がお土産としてたいへん人気を博した時代がありました。日光では、産業振興を目的とする美術工芸品陳列場「鍾美館」が1894(明治27)年に、同様の役割を担う「日光美術館」が1905(明治38)年に開業しています。これらの店で一番人気の画家だったのが、五百城文哉でした。五百城を中心とする、日本の風俗を活写し社寺を精緻に描きあげた「土産絵」の数々は、正当な美術史からとりこぼされてきた、もう一つの美術史がこの日本にあったことを、私たちに教えてくれます。

本展では、五百城文哉の生誕160年を記念して、当館が開館以来収集してまいりました五百城の作品や資料を、弟子である小杉放菴や、同時代に土産絵を描いていた画家たちの作品と共に会し、この日光で育まれた師弟の芸術をご紹介します。

令和5年12月  
小杉放菴記念日光美術館

## 1 師・五百城文哉

五百城文哉(1863-1906)は、現在の茨城県水戸市に生まれた洋画家です。本名は熊吉。20代のときに農商務省山林局に勤め、前後して高橋由一に西洋画を師事。その後、同舎でも学んでいます。1892(明治25)年、シカゴ万国博覧会への出品制作のため日光を取材に訪れたのを機に永住。二社一寺周辺を描いた精緻な絵画をはじめ、高山植物の研究にともなう写実性に優れた植物画を数多く描きました。そして何より、少年時代の小杉放菴に絵画の基礎を教えたのが、この五百城文哉でした。

### 個人蔵

#### 五百城熊吉(文哉)

《山毛櫨帯中の景(田中譲『校正 大日本植物帯調査報告・図表』農商務省, 1887年刊挿図)》

1887(明治20)年

複製版: 大日本山林会 1998年



《山毛櫨帯中の景》



《白檜帯中の景》

**解説:** 1884(明治17)年から農商務省山林局に勤務していた若き五百城熊吉(文哉の旧名)の、この時代としては現在のところ唯一確認できる絵画資料です。この次の頁には、やはり五百城による《白檜帯中の景》が掲載されています。著書の田中譲は、五百城とは高橋由一門の先輩にあたる人物。1879(明治12)年から画家の高島北海・丸山宣光とともに植物の全国調査にとりこんでおり、その成果をまとめたのが本書です。高島は1884年5月から4年間におよぶ欧州出張・留学により植物調査から離脱したため、おそらく田中の推薦により、高島の代わりとして五百城が雇用されたのではないかと考えられます。

### 個人蔵

#### 五百城熊吉(文哉)

《老婆》

1880-1890年代 紙/水彩

38.0×28.8 cm 平成29年度寄託

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《五百城俊(母)肖像》

制作年不詳 布/油彩 30.4×21.3 cm

平成29年度寄託

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《五百城みつ(妻)肖像》

制作年不詳 布/油彩 38.1×28.7 cm

平成29年度寄託

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《のぼり(阿新丸)》

1897(明治30)年 絹本着色,まくり 84.0×28.8 cm 平成29年度寄託

**款記・印章:** 丁酉端午為了一 文哉戯画 [朱文方印「文哉」]

**解説:** 阿新丸は南北朝時代の公卿(大政官の最高幹部)である日野邦光(1320-1363)の幼名。13歳のとき佐渡に渡り、父・日野資朝の仇である佐渡守護本間山城を討とうとしたが果たさず、その子である本間三郎を討って落ちのびます。この後、追手が迫るなか、細長い竹の先へよじのぼり、竹を大きくしならせて深い堀を飛び越えたという逸話があり、錦絵や節句の祝画などの画題として好まれました。五百城文哉が描いた本作もこの場面を描いたものです。阿新丸はその後、老いた山伏に助けられて都へ帰り、出世していきます。

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《のぼり(牛若丸)》

1897(明治30)年 絹本着色,まくり 83.7×29.5 cm 平成29年度寄託

**款記・印章:** 丁酉端午為了一 文哉戯画 [朱文方印「文哉」]

**解説:** 1897(明治30)年4月14日、五百城文哉に了一という息子が誕生します。本作は了一の初節句祝いとして五百城自ら描いた幟で、五百城が日本画を描いていた技量を持っていたことがうかがえます。息子が強く育つように祈りがこめられましたが、不幸にもこの一ヶ月余後の6月23日、了一は急逝してしまい、五百城家は深い悲しみに襲われました。この時のことを小杉放菴は次のように書き残しています。

〈日光山内瀧の尾神社への道の左に開山堂、開山勝道人の木像をまん中に左右に十大弟子しんかんと並んでござる、開山堂の傍に小さい産の宮、香車堂とも云はれて将棋の駒の香車が並んで居ます、妊婦ある家でこの香車を借りて行つてまつれば安産をす、安産をすれば又新しい香車をこしらえて納める習わし、少年の頃師匠の夫人が妊娠、年三十二近い初産だから心元なく、私が使に立つてこの香車を借りた、安産をして男の子、名を何とつけようとして師匠が私を相手にかれこれと思索して、了一つつけましたが半年もたたずに亡くなった、夫婦力を落して、一で了ると云う意味になるのであつたと、かえらぬ事を悔やんだが、その後遂に子なしです(「瀧の尾」故郷) 龍皇閣1957)

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《五百城一(長男)肖像》

1897(明治30)年頃 布/油彩

27.3×19.0 cm 平成29年度寄託

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《村娘》

1898(明治31)年頃 紙/水彩

57.8×44.0 cm 平成18年度寄託

[栃木県指定有形文化財]

### 個人蔵

#### 五百城文哉

《赤松家当主肖像》

1901(明治34)年 カンヴァス/油彩 41.6×30.5 cm 平成18年度寄託

### 01030079

#### 五百城文哉

《駕籠かき》

1892-1905(明治25-38)年頃

紙/水彩 49.0×32.5 cm

平成22年度購入



**解説:** 明治期に日光を訪れた外国人旅行者が残した日本滞在記のなかに、中禅寺湖まで登る際、男2人で担ぐ駕籠を雇っていたという記述が見られるように、日光にも、この絵のような「駕籠かき」がいました。興味深いのは、影や暗い部分に、紫や青系統の色が使われていることです。弟子である小杉放菴が、こんなことを書いています。〈師匠は芸術に就いてまことに我執が無かった。(中略)新派は明快で紫色が基調、是に対する在来の油絵を旧派と呼ばれる。旧派の調子暗く手堅き行き方、師匠も勿論旧派だが、一度東京へ行って其の白馬会を見て来て、あれは結構なものだと感心して、自身でも紫色で風景をやつて見、私も指図をされつつ描いて見た記憶がある。〉(我が修業時代(十三から二十三歳まで)『新若人』2巻7号1941.10)

高橋由一の流れを汲む五百城文哉は旧派に属していましたが、新派の代表であった黒田清輝とも親交があり、良いものは良いと取り入れる性格だったようで、本作では影に紫色を使うことで、明るい光を感じさせることに成功しています。

### 01030020

#### 五百城文哉

《四本龍寺・三重塔》

1892-1905(明治25-38)年頃

紙/水彩 51.2×34.6 cm

平成9年度購入



**解説:** 日光開山の地、かつて四本龍寺があった場所に建つ三重塔。江戸時代の大火で一度全焼した後、正徳3(1713)年に江戸幕府直轄工事で再建されました。現在は、輪王寺三重塔として、重要文化財に指定されています。五百城文哉はこの塔を、林の中から覗くように、奥行きをつけて描いています。手前にある木立や草々のしつかりとした描写は、植物画を得意とした五百城ならではのものです。この作品と、現状とを比較してみると、屋根



に若干の違いが見受けられます。これは、寛政12(1800)年以来、銅瓦葺だった屋根が、2003(平成15)年に三重塔の半解体修理が行われた際に、建設当初の榎葺屋根に復元されたためと考えられます。

01030019  
五百城文哉  
《滝尾神社・鳥居》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 46.7×62.7 cm  
平成9年度購入



**解説:**滝尾神社は、弘仁11(820)年に弘法大師が創建したと伝えられる日光二荒山神社の別宮で、現在の社殿は正保3(1646)年に建立されました。本作は、元禄9(1696)年に三代将軍徳川家光の忠臣・梶定良が奉納した御影石製の鳥居を描いたもの。中央の丸い穴に小石を3つ投げ、穴を通った数で運を試したという「運試しの鳥居」として、よく知られています。明治後期に描かれたと推測されますが、崩れる前の石垣の様子や、かつて石畳にそって柵が設けられていたことなどが、この絵によってわかります。

01030046  
五百城文哉  
《東照宮・五重塔》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 50.8×34.1 cm  
平成9年度購入



01030066  
五百城文哉  
《東照宮・五重塔》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 49.9×33.1 cm  
平成15年度購入



01030094  
五百城文哉  
《東照宮雪景》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 33.0×50.5 cm  
平成27年度購入



01020037  
五百城文哉  
《東照宮・陽明門》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
カンヴァス/油彩 71.0×55.0 cm  
平成14年度購入



01030082  
五百城文哉  
《東照宮・陽明門》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 75.5×118.0 cm  
平成23年度購入



**解説:**現存する五百城文哉の水彩画のなかでも一、二を争う大作。裏面に「鍾美館」のスタンプがあることから、明治後期に日光にあった鍾美館が扱った作品であったことがわかります。鍾美館は、守田兵蔵(1844-1925)によって開設された美術工芸品陳列場です。守田は、下野国壬生藩士から、秋田県阿仁鉱山や栃木県足尾銅山の技師を経て実業家に転じた人物。1894(明治27)年、日光町四軒町(現在の田母沢御用邸そば)に鍾美館を開設、日光の美術工芸品を陳列・販売し、地域産業の振興に尽くしました。鍾美館では、主に外国人に向けて、日光彫りなどの工芸品や、社寺や日光の風景を描いた水彩画が販売されており、五百城は鍾美館と専属契約を結んでいたと考えられます。

個人蔵  
『鍾美館絵画出品目録』  
1901-1903(明治34-36)年  
平成29年度寄託

**解説:**1901(明治34)年に、五百城文哉と鍾美館との間で交わされた契約書。裏表紙に「明治卅四年八月起 齋菜窩」の墨書があり、五百城が保管していました(齋菜窩は五百城が自邸につけた名)。

内容は、規約として、画家は鍾美館

以外の店のために制作をしてはならないこと、絵の価格は画家自身が決め、鍾美館側はまずその額の2割を制作費として支払うこと、販売後は残りの金額を折半することなどが記されています。1901~1903年にかけて鍾美館へ納められた絵の目録もあり、当時の水彩画販売の背景がうかがえる、貴重な史料です。

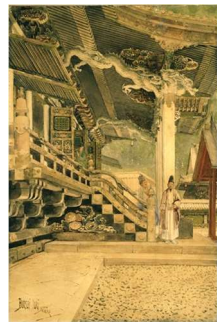
01030021  
五百城文哉  
《東照宮・陽明門と神輿舎》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 51.2×34.5 cm  
平成9年度購入



01030083  
五百城文哉  
《東照宮・神楽殿と神輿舎》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 66.4×48.6 cm  
平成23年度購入



01030022  
五百城文哉  
《東照宮・拝殿》  
1892-1905(明治25-38)年頃  
紙/水彩 50.5×33.4 cm  
平成9年度購入



個人蔵  
五百城文哉  
《キバナノコマノツメ》  
1900-1905(明治33-38)年頃  
紙/水彩 26.1×15.2 cm  
平成29年度寄託

**解説:**五百城家に残る文哉の遺品に遺されていた水彩画。日光では太郎山や白根山など、高山の湿り気の多い草地に6~7月頃に見られる花で、五百城にとって思い出深い花です。五百城が

手がけた自邸の庭は、日本最初のロックガーデンとして、早くから多くの植物研究者たちに注目されていました。そして1900(明治33)年8月、東宮殿下(後の大正天皇)が日光を訪れた際、五百城邸に立ち寄り、その時のことを五百城が次のように語っています。

くさうかうして居るうちに、東宮殿下が弊廬へ行啓になり、黄花の駒蹄を御覧になって、黄花の董は珍しいとの仰せであったから、敬んでこれが生植物に、写生画を添えて捧呈した。)(高山植物園の由来)『園芸界』1904.12)

これ以降、東宮殿下が近臣の人々に、日光の五百城の庭の話をよくするので、皇室関係者や華族などが、日光に来た際に、五百城を訪ねてくるようになったといえます。

個人蔵  
五百城文哉  
《前田曙山「園芸文庫」第1巻、第5巻口絵》

1904(明治36)年刊行  
発行元:春陽堂  
**解説:**小説家で、園芸研究者でもあった前田曙山(1872-1941)による園芸解説書。様々な画家が口絵を描いており、五百城文哉もその一人でした。五百城は、第1巻に日光の山に7月咲く花々を、第5巻にはツルリンドウの果実とリュウノウギクを描いています。



個人蔵  
五百城文哉  
《詩》  
制作年不詳 紙本墨書、軸装  
152.0×83.1 cm 平成29年度寄託

**漢詩・款記:**  
乍訝家頭進奇香 花信遙来自尾陽  
書中咲談如相對 評紅品白春滿堂  
積翠萬切天正舞 抽雲挑霞摩雲峇  
吹簫駕鸞翠微外 烟人霞客捷石房  
巖上苔厚一尺餘 靈草閑笑香案傍  
清氣逼人不可犯 素山靈之所秘藏  
采々滿囊心膽栗 人問來覓移活方  
移活之法豈有他 紙慶烟霞通心腸  
隣山愛山如在山 松村竹邑甘山長  
獨裁百草遠几席 清香縹渺形骸忘  
夕披草根求丹沙 朝掃葉末酌瓊漿  
雲色細龍頑石起 嵐氣高從瓦盆揚  
披襟交久未識面 雁鯉頻看千里月  
何當与君戴三朵花  
一咲或出利名場  
寄懷  
鄰山詞兄 六麓文哉拜草

**解説:**《鄰山》という人物のために詠まれた五百城自筆の漢詩です。机まで不思議な香りがただよってきたことに驚く、花が咲いたとの知らせが遠い尾張から届いた、この手紙を読んでいるのとまるであなたと相対しているかのようだ、この人物から何らかの開花を知らせる手紙が、山中で多くの草花を育てる生活を送る五百城のもとに届いたことを喜んでいます。《鄰山》はおそらく五百城も寄稿していた日本山岳会誌『山岳』に名前が見える永田鄰山だと考えられますが、何者であるかは今のところ不明です。



個人蔵  
五百城文哉  
《山草絵葉書》  
1905 (明治 38) 年 7 月刊行  
発行元：春陽堂 各 14.0×9.0 cm  
平成 29 年度寄託  
**解説**：五百城文哉原画による絵葉書セット。五百城が口絵を描いた『園芸文庫』と同じ春陽堂から発行されました。アツモリソウ、オオサクラソウ、クルマユリ、シラネアオイ、タカネスミレ、チンマギキョウ、チョウノスケソウ、ハクバフウロ、ミヤマリンドウ、ユキワリザクラの全10種。『図書月報』1905 (明治 38) 年 8 月号に、「七月十五日新版」と記載されていることから同年 7 月発行と確認でき、同年 8 月 9 日の『東京朝日新聞』に広告も掲載されています。

個人蔵  
《写生帖》2冊  
明治後期 平成 29 年度寄託  
**解説**：五百城家に伝わってきた様々な写生の貼込帖です。ほとんどサインがないため特定は困難ですが、五百城文哉自身による書画の書きつけのほか、おそらく門人複数人のものと思われる、ちょっとした写生や落書きが多数貼り込まれています。なかには小杉放菴の本名である「小杉国太郎」や（国府浜家に養子にいられた国太郎は 1901 年 5 月に小杉家に復籍します）、五百城が小杉に与えた最初の雅号である「台東」などの文字が散見されることから、若き小杉放菴の絵も含まれているのではないかと期待されます。

個人蔵  
《五百城文哉肖像写真》3点  
1890 (明治 23) 年撮影  
平成 29 年度寄託

個人蔵  
《弟子に指導する五百城文哉写真》2点  
撮影年不詳 平成 29 年度寄託

個人蔵  
《五百城文哉邸[日光・萩垣面]の庭》3点  
撮影年不詳 平成 29 年度寄託  
**解説**：五百城文哉邸の庭と五百城夫妻。高山植物を育てられるよう、巨石を積み、高山のような作りにしたこの庭には、五百城をはじめ、友人たちが持ちこんだ諸山の草花が何種類も育ち、我が国最初のロックガーデンと位置づけられています。

個人蔵  
《第 1 回山草会陳列会会場》3点  
1902 (明治 35) 年撮影  
平成 29 年度寄託  
**解説**：写真裏面に「東京上野薫風園 盆栽陳列会出品撮影 日光町 酸菜窩所有」などと書かれていることから、1902 (明治 35) 年 5 月に、五百城文哉、城数馬、木下友三郎が主催して開いた野生植物陳列会 (第 1 回山草会) の会場であると考えられます。「酸菜窩」は五百城が自邸につけた名で、「粗食に甘んずる」といった意味。この陳列会を見た植物学者の矢部吉禎が、次のように報告しています。  
〈本邦従来に見る秀樹と石塊とを排合せざる盆栽等とは大に趣を異にし当日陳列個数は百に充たざれども悉く氏等が採集培養せしものにして多くは「アルパイン」植物を代表するに足るべきもの (中略) 一々叮嚀に之を清雅なる鉢に栽へ之れが名称を添へられたり〉(『城氏ノ高山植物ヲ見ル』『植物学雑誌』183 号、1902 年)  
よく見ると、壁に植物を描いた絵が

貼られています、五百城の絵でしょうか。これを機に植物愛好グループ「山草会」が結成されることとなります。

個人蔵  
五百城文哉ほか  
《印章》41点  
平成 29 年度寄託

個人蔵  
《自刻印譜集》  
紙本朱印墨書、軸装 151.5×15.0 cm  
平成 29 年度寄託  
**款記**：故文哉五百城画伯自刻印集録為紀念 故人第十三回忌 干時大正七年六月  
**解説**：五百城家には 41 点の印章が伝わっています。書の作品などに使用されていたようですが、多くは篆刻もたしなんでいた自作のものであったようです。自作以外では益田香雪が彫った印章もあったようですが、他の篆刻家の作品もあったのかどうか、研究はまだほとんど進んでいません。この印譜集は、1918 (大正 7) 年 6 月に、五百城文哉の十三回忌を記念して、五百城自刻による印影が軸装仕立てにまとめられたもの。五百城が篆刻も得意としていたこと、大正半ばになってもこのように五百城を大切に想う弟子なり友人なりがいたことを伝える、大切な史料です。

個人蔵  
青山勇  
《東湖先生画像記》  
1889 (明治 22) 年  
紙本墨書、軸装 30.7×95.5 cm  
平成 29 年度寄託

**句点文**：東湖先生画像記  
今茲紀元節 勅定憲法。是日東湖藤田先生。贈從四位。実為異数於舊藩人五百城某以西洋画法。図先生肖像。先是内藤某写先生像久伝于世。五百城氏本之而神采奕々如生。非前図所能及。岡本某大関某与五百城氏相謀。諸常磐神社。先生嘗賦続正気歌云。死為忠義鬼。極天護皇基。嗚呼先生忠義。固根天性。然其誓死任大義者。蓋有所由来矣。文政中英夷屢出沒東海。遂來常陸大津村。々人捕獲以告。先生之先人幽谷翁謂先生曰。汝宜速赴天津慶夷虜。庶乎可以少伸神州之正氣。先生時年十九。誓死將往。適幕吏放還之。雖事竟不果。先生忠慨義憤。以死自誓者。蓋從此始云。昔者楠公坐桜井駅。以菊作刀与小楠公。戒以滅賊匡天下。遺還河内。小楠公慷慨憤激。不忘敵愾。斃而後止。然而楠公躬必死。又使其子入死地。今翁在生地。独欲使子死此翁之誠不如楠公之忠耶。日不然。翁之言云。吾不幸多女子。唯有汝一男耳。汝而死則吾祝絶矣。是吾与汝命窮之時。汝勿顧虜翁之至性惻怛。聞者孰不感動。且建武之世干騷擾。文政之時天下太平。翁勉太平。命死愛子。苟非忠肝義膽極壯烈者。不能也。抑先生之於議論於文章於事業。無一不宏偉正大。此雖云由其學問高邁寸略超絶。然未嘗不本於家門之訓。先生所謂極天護 皇基者。亦將在於斯。頃日勇与先生家子彊彌及長谷川良山栗田叔栗。協議納烈公画像於常磐神社。而今又見先生之像之成。庶幾我義烈二公尊 王之風之行。亦与無天壤無窮矣。

明治廿二年三月廿日。門人青山勇謹撰。  
**解説**：五百城文哉は 1889 (明治 22) 年、幕末を代表する水戸学の学者藤田東湖の油絵肖像を依頼制作、故郷水戸の常磐神社へ奉納しました。本作は、五百城家に伝来していた常磐神社奉納に関する由来書です。東湖の塾生であった青山勇によるもので、藤田彊彌 (東湖の跡継ぎ)、長谷川作十郎 (号：

艮山、元水戸藩士)、同門の国学者栗田寛 (号：叔栗、東京帝国大学教授) と協議して、まず水戸藩第九代藩主徳川斉昭の肖像を常磐神社へ奉納し、続けて藤田東湖の肖像画を奉納することになったため、五百城文哉に西洋画法で描いてもらったということが書かれています。

ほぼ同文が『薦藻集』(常陽社、1889.12)にも収載されており、同書には五百城自作の漢詩も入っています。同書によれば、1889 年 2 月 11 日の大日本帝国憲法発布にともない、幕末維新期の国事殉難者に対して贈位が実施され、藤田東湖に正四位が贈位されたことを記念してのことだったことが理解されます。

五百城は、おそらくこの東湖像を基にした印刷物を発行していたようで、1889 年 3 月の『出版書目』に、五百城を発行元とする『東湖先生肖像』との記載が確認され(『出版月評』)、数年後には文林堂書店から石版画が販売されています。1927 (昭和 2) 年の明治大正名作展に出品されるなど、五百城の代表作として知られていましたが、残念ながら 1945 (昭和 20) 年 8 月の水戸空襲に遭い焼失してしまいました。

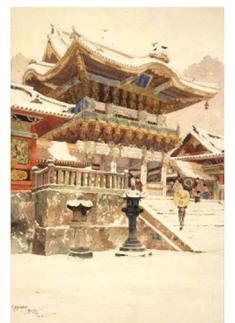


参考：五百城文哉《藤田東湖像》(『明治大正名作展号』第 2 輯、東京朝日新聞発行所、1927)

## II 弟子・小杉放菴

五百城文哉には何人かの弟子がいたといわれていますが、最も深い子弟関係を築き、大成したのが小杉放菴でした。小杉の最初の雅号〈未醒〉は、お酒の呑みすぎを五百城からたしなめられたため、反抗心から〈未だ醒めず〉と自らつけたというエピソードがよく知られています。小杉もまた明治末の頃に、師とともに数多くの“お土産絵”を描き、写実力に磨きをかけていきました。本展では、近年続々と発見されたこの時代の水彩画を中心に、画家として大成した後、晩年へと至るまでの小杉放菴の画業をご紹介します。

01030049  
国府浜国太郎 (小杉放菴)  
《東照宮・陽明門》  
1900 (明治 33) 年 紙/水彩  
50.7×34.6 cm 平成 10 年度購入



**解説**：小杉放菴は、一時期養子になっていたことがありました。1884 (明治 17) 年、3 歳の時に国府浜曾太郎の養子になった放菴は (正式な入籍は 1886 年)、1901 (明治 34) 年に 20 歳で小杉家に復籍するまで、「国府浜国太郎」という名前でした。うっすら 1900 (明治 33) 年と年記が読める《東照宮・陽明門》は、19 歳の国府浜国太郎が描いた、放菴の現存するもっとも古い作品です。複雑な構造の陽明門を、雪を利用して、巧みに省略を交えながら描いており、師・五百城文哉の教えを見事に自らのものとしていることに驚かされます。階段を上る人物の傘に、「鍾美館」と書かれていることにも注目。鍾美館は、五百城が土産絵の販売契約を結んでいた美術陳列所でした。おそらく若き小杉放菴も鍾美館と関わっていたのでしょう。さりげなく画中にスポンサーの宣伝を入れているわけですね。

個人蔵  
国府浜国太郎 (小杉放菴)  
《狐師》  
1900 (明治 33) 年頃 紙/水彩  
40.5×27.7 cm 平成 29 年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《農夫》  
1900 年代 紙/水彩 49.0×20.5 cm  
平成 29 年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《風景》  
1900 年代 紙/水彩 48.0×21.5 cm  
平成 29 年度寄託



個人蔵  
小杉未醒  
《帆船の見える浜辺》  
1900年代 紙/水彩 33.5×50.2 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《海岸風景》  
1900年代 紙/水彩 32.8×47.5 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《夜の海岸》  
1900年代 紙/水彩 33.0×49.2 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《子供のいる風景》  
1900年代 紙/水彩 32.2×48.5 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《滞畔》  
1900年代 紙/水彩 33.5×60.6 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《釣りのいる風景》  
1900年代 紙/水彩 33.7×50.5 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《湖畔》  
1900年代 紙/水彩 32.2×46.3 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《河原》  
1900年代 紙/水彩 32.7×50.3 cm  
平成30年度寄託

個人蔵  
小杉未醒  
《今市橋》  
1900年代 紙/水彩 34.3×51.0 cm  
平成30年度寄託

01030023  
小杉未醒  
《神橋》  
1901(明治34)年頃 紙/水彩  
34.0×50.9 cm 平成9年度購入



**解説:**二荒山神社の神橋は、聖地日光の表玄関を飾る朱塗の美しい橋として知られています。土産絵や観光絵葉書でも神橋を扱ったものはいへん多く、小杉放菴もまた、〈未醒〉と号していた青年時代に、色づき始めた紅葉と共に、神橋を鮮やかに描いています。本作の神橋は、向かって左側の石造橋脚に継ぎ目が見えることから、1902(明治35)年9月の洪水で流失する以前の神橋であることがわかります。加えて「M.KOSUGI」のサインがあり、幼少期に国府浜家の養子になっていた放菴が小杉家に復籍したのが1901

(明治34)年5月であることから、紅葉が見える本作は、1901年秋頃の作である可能性が高いと考えられます。

01030055  
小杉未醒  
《東照宮・上神庫》  
1900年代 紙/水彩 50.5×30.4 cm  
平成12年度購入



01030025  
小杉未醒  
《東照宮・下神庫》  
1900年代 紙/水彩 51.3×34.4 cm  
平成9年度購入



**解説:**日光東照宮の表門をくぐって、最初に眼の前に現れる校倉造りの建物が下神庫です。横に並ぶ中神庫、上神庫とあわせて三神庫と称され、下・中神庫には千人武者行列に用いる装束が収められています。東照宮を描いた土産絵は、誰がどの場所を描くにしても、似通った構図になってしまうことが多いなか、手前に大きな杉を配して奥に下神庫を見る本作の構図は他に類例がなく、土産絵であっても獨創性を追求した画家の気概が感じられます。本作には「Misei KOSUGI」のサインがあり、幼少時に国府浜家へ養子にっていた未醒(放菴)が小杉家に復籍したのが1901(明治34)年5月であることから、本作はこれ以降に描かれた作品と考えられます。

01030097  
小杉未醒  
《東照宮》  
1900年代 紙/水彩 60.6×72.7 cm  
平成29年度購入



資料  
高村眞夫  
《小杉未醒宛葉書》

1906(明治39)年 紙/インク・水彩  
14.0×9.0 cm 平成26年度購入



**解説:**送り主である高村眞夫(1876-1954)は、新潟市生まれの洋画家。小杉放菴が学んだ画塾・不同舎の先輩であり、とくに明治後期に親しくしていました。この葉書は、高村が避寒旅行先から小杉宛に送った1906(明治39)年元旦付の近信で、高村自筆の自画像らしい戯画が描かれています。興味深いのは、宛先になっている小杉の住所が〈沼津牛臥植村別荘〉であることです。当館寄託の五百城文哉史料のなかに、1906年1月1日付で五百城に宛てられた城数馬からの年賀状があり、これも宛先が〈静岡県沼津市牛臥植村別荘 五百城文哉様〉になっているのです。現在の静岡県沼津市牛臥海岸は、五百城が1905(明治38)年末から病気のため転地療養していた地であり、彼はここで1906年の正月を迎えていました。高村の葉書が1906年元日直後に送られたものである以上、小杉は五百城の転地療養に同行していたか、少なくともしばらく滞在していたと見るべきでしょう。

個人蔵  
《五百城文哉邸庭園にて》  
1906(明治39)年頃撮影  
平成29年度寄託  
**解説:**五百城文哉邸の庭園で、「故五百城文哉君之墓」と書かれた墓標を持つての記念写真。若き小杉放菴や五百城の妻みつの姿を確認できます。現在見ることの出来る墓石とは異なること、お墓の上に乗るとは考えにくいことから、この場所が五百城のお墓というわけではないでしょう。

01020079  
小杉未醒  
《降魔(習作)》  
1907(明治40)年頃  
カンヴァス/油彩 33.0×45.0 cm  
令和元年度購入



**解説:**1907(明治40)年3~7月にかけて開催された東京勸業博覧会で褒賞を受賞した小杉未醒(放菴)による油彩画《降魔》の習作です(後に審査をめぐる紛糾により受賞は辞退)。未醒は、翌年の奥羽六県連合共進会美術展にも《魔襲》という作品を出品しており、両作は同じ作品か、あるいは同一のテーマを描いたものだった可能性があります。しかしこれらの作品は、その後所在不明になっているため、本作は未醒時代初期の作風を知る重要な手がかりとなります。「降魔」とは、菩提樹の下で修行する

釈迦が、魔王マラーの誘惑や攻撃にあいながらも悟りを開く場面です。釈迦の足元には魔王が放った染欲・能悦人・可愛楽の三女が、釈迦を取り囲むように獣の顔を付けた魔衆の大軍が描かれています。習作・本画ともに画面右端にいる金色の冠をかぶった人物が魔王と推測出来ます。習作と本画の釈迦と比較すると、親指同士を触れあわせて楕円形を作る「法界定印」から、左手を膝上に置き右手で地を指す「降魔印」への変更、また、左足を上に組む「降魔坐」から、右足を上に組む「吉祥坐」への変更を確認出来ます。これは、習作後に『大蔵経』にある〈如来昔菩提樹下にあり正覚を成ずるの時身は吉祥に安じ手は降魔の印を作す〉に従い修正したものと考えられます。他にも魔女のポーズや魔衆の配置に異同が見られ、試行錯誤の跡が見受けられます。独立した画題として「降魔」が扱われることは、この時代まだ稀なことでしたが、当時はインド原始仏教への関心が高まっていたという背景もあり、未醒はインドのアジャンター壁画の複製を参考にしながら、この意欲作に挑戦したようです。

個人蔵  
小杉未醒  
《五百城みつ宛葉書》  
1913(大正2)年5月14日付  
紙/印刷・インク 9.0×14.0 cm  
平成29年度寄託

**解説:**小杉放菴がヨーロッパ巡遊中、スペインのアルハンブラから、五百城文哉の末亡人へ送った絵葉書。放菴の留学時代の史料として貴重です。五百城文哉の没後、だいぶ後年になっても、小杉放菴は五百城みつを慕い続けていました。放菴の友人である画家木村莊八が、ある日のこんな情景を眼にしています。〈僕は故五百城先生の奥さんと小杉さんの田端の家でお目にかかったことがあったが、小杉さんが手を引かんばかりにして、品のよい老婦人を僕に紹介されたのであった。〉(「小杉放菴」『三彩』1946.11)

01020073  
小杉未醒  
《入江の一角(プルトーニュ風景)》  
1913(大正2)年  
満谷国四郎・小杉未醒・柚木久太 三氏滞欧記念洋画展 [1914]  
カンヴァス/油彩 46.0×61.0 cm  
平成29年度購入



01020068  
小杉未醒  
《飲馬》  
1914(大正3)年 再興第1回院展  
カンヴァス/油彩 74.0×150.0 cm  
平成25年度購入



**解説：**一年間におよぶヨーロッパ遊歴から帰国した小杉未醒（放菴）は、かつて横山大観と構想していた「絵画自由研究所」の計画を引き継ぐかたちで、1914（大正3）年日本美術院の再興に参画します。小杉はその第一回展にただ一人の洋画部同人として、油彩画《飲馬》のほか3点の水彩画を出品しました。万里の長城建設に駆り出され、疲弊した馬に水を飲ませる情景を詠んだ漢詩「飲馬長城窟行」に題材をとったと考えられる本作は、油彩画でありながら、日本的な平面性と装飾性をあわせ持っています。院展の会場では日本画と隣りあって陳列されたにも関わらず、会場の雰囲気を乱すものではなかったといえます。背景の岩山の輪郭は、内側に向かって暈しが入られることで量感が表現されていますが、この技法は、次第に当時の展評のなかで「片ぼかし」と呼ばれるようになり、日本美術院同人の横山大観や今村紫紅らの日本画にも影響を与えました。

01020010  
小杉未醒  
《黄初平》

1915（大正4）年 カンヴァス/油彩  
52.0×45.3 cm 平成5年度購入



**解説：**中国で出版された、仙人の伝記集『列仙伝』に登場する晋時代（265～420年）の人物。40年間行方不明でしたが、兄に発見された時には、石を羊に変えてしまうほどの仙術を身につけていたという伝説があります。画題としては古くからあるものですが、本作のように黄初平を洋装で表現したものはたいへん珍しいものです。年記から1915（大正4）年1月作とわかりますが、同年10月の再興第2回院展に、放菴は同じテーマの油彩画を出品しており、その習作的な意味をもつのかも知れません。金泥と油絵具を塗り重ねて古画のようなニュアンスを出すなど、日本の表現伝統を踏まえつつ、西洋の技法で描いた試みに、小杉放菴が目指した絵画世界を見ることができま

01010074  
小杉未醒  
《湖山春色》

1917（大正6）年頃 絹本着色、軸装  
143.0×50.4 cm  
平成11年度寄贈[大木コレクション]  
落款・印章：未醒 [朱文方印「未醒」]



01010116

小杉放菴  
《大黒天》

1924（大正13）年 紙本着色、軸装  
93.7×48.0 cm 平成20年度購入  
賛文・款記・印章：福如東海 寿如南山/大正甲子正月三日 放菴 [朱文方印「未醒」]



**解説：**大正13年1月3日、小杉がそれまで名乗っていた〈未醒〉から〈放菴〉へと雅号を変えた直後の作であるといわれます。「福如東海 寿如南山」は、福は東海へ水のように留まることなく流れ、寿は南山に立つ松のように老いることがないという意味の、中国のお祝いの言葉です。当日の小杉の日記によれば、本作は田端の自宅で描かれたもので、〈今日もよき日なり 午後柳沼君の為に大黒さまを描く〉と記されています。〈柳沼君〉は武俠社創立メンバーで、小杉の友人だった柳沼澤介（1888-1964）のこと。柳沼は、小杉夫人の妹である相良ミツと1914（大正3）年に結婚しており、本作制作当時、柳沼は小杉の義弟という関係でした。

01020007  
小杉未醒  
《泉》

1925（大正14）年頃  
カンヴァス/油彩 179.0×363.0 cm  
平成4年度寄贈



**解説：**1925（大正14）年に完成した東京帝国大学（現・東京大学）安田講堂には、舞台上に小杉放菴が制作した大壁画《湧泉・採果》、廊下に同じく半円形の小壁画《動意》《静意》が設置されました。ただし、放菴が1924（大正13）年8月に新聞のインタビューに答えた時点では、画題は大壁画を《成熟》、小壁画を《土》《泉》の三部作とする予定としていました。この《泉》が本作です。しかし、1925（大正14）年4月から大壁画の制作に入ると、放菴はこの《泉》の要素を大壁画にとり入れたため、本作の廊下への設置を中止してしまいました。そして大壁画完成後、小壁画は《動意》《静意》へ画題を再考され、《泉》はそのまま陽の目を見ることがなかったのです。

本作はその後ながらく巻かれた状態で保管され、1992（平成4）年に小杉放菴のご長男・小杉一雄氏より日光市へ寄贈されました。安田講堂に設置される直前までいっただけあり、その美しさ、完成度は見事です。湧き出す泉は知識の源として、新しい想や研究を生み出す大学を象徴していると考えられます。

個人蔵

五百城文哉著 小杉放菴編刊

『文哉詩鈔』

1933（昭和8）年刊

22.6×13.5 cm 平成29年度寄託

**解説：**小杉放菴（放菴）が私家版として編集・出版した、師・五百城文哉の遺稿集。五百城が遺した漢詩のほか、放菴の「五百城文哉小伝」で構成されています。附記によれば、日光の興雲律院境内に、五百城の碑を建てる計画があり、五百城の友人であった城数馬から若干の費用を預かっていましたが、実現できず、城の没後、小杉の友人杉田雨人の協力を得て、この本を刊行したそうです。

01010076

小杉放菴

《梅花鳴禽》

1935（昭和10）年頃

紙本墨画淡彩、軸装 47.4×55.6 cm

平成11年度寄贈[大木コレクション]

落款・印章：放菴 [朱文方印「安明山客」]



**解説：**白梅にヒヨドリ。そのシンプルな構図が、放菴紙の風合いをうまく活かしています。制作年は落款の字体と、印章「安明山客」の使用例が1935年から始まることから推定しました。ボサボサした頭部に茶色いほっぺたの愛らしいヒヨドリ（鶉）は、現在でこそ一年中見かける野鳥になりましたが、日本では戦後しばらくまでは10月に渡来し、4月に渡り去っていく冬鳥でした。小杉放菴はとくに1930年代にヒヨドリを好んで描いており、1934年の《横竹鳴禽》（三越本店第3回個展）、《梅花鳴禽》（松島画舫新作画展）、1935年の《春朝小景》（現代名家新作展）などの作例を確認することが出来ます。

01010196

小杉放菴

《今日好天》

1940（昭和15）年頃

紙本墨画淡彩、軸装 44.5×54.0 cm

令和4年度寄贈

款記・印章：今日好天/放菴 [朱文方印「安明山客」] /遊印 [朱文方印「放菴半禿」]



**解説：**画面の半分を占める竹林を近景に、今日は良い天気だと機嫌よく魚釣りに出かける男が一人描かれています。小杉放菴は、「今日好天」と同題で画題もよく似た作品を1941（昭和16）

年に大阪で開いた個展に出品しており、本作もまた落款や作風から、これと近い時期に描かれたと推測されます。隠遁の象徴でもある漁夫を、以前から放菴は好んで描いていました。戦前までは水戸市で一番大きな呉服店だったという井金呉服店の旧蔵品です。



## Ⅳ 周辺の画家たち

1870年代から1900年代にかけて、外国人観光客のために、お土産用の水彩画を販売する店が日光にありました。日光町の殖産興業政策のため、現在の田母沢御用邸近くに開設された美術工芸品陳列場「鍾美術館」や、現在は羊羹店を営んでいる中鉢石町の「鬼平」などがその代表的な店です。こうした「お土産絵」として、外国人観光客を中心に人気を博したのが、絢爛たる二社一寺（東照宮・輪王寺・二荒山神社）の建造物や、杉並木の街道など、日光の代表的な景観を精緻に描きあげた水彩画でした。その専門店は、東京や横浜にもあり、五百城や小杉放菴をはじめ、岡部花枝寒、田淵保、河久保正名、沼辺強太郎など、多くの画家が関わっていました。

01030037

岡部花枝寒

《東照宮・陽明門と鼓樓》

明治後期 紙/水彩 49.4×65.7 cm

平成9年度購入



**解説：**〈KAWASHIKAN〉サインの本作は、極めて高い描写力を持つ画家であるにもかかわらず何者なのか長年不詳のままでしたが、近年になって岡部花枝寒（おかべ・くわしかん、生没年不詳）という画家だと判明しました。その名は、小杉が20代の時に親しくしていた文士樋口配天による、1906（明治39）年に小杉・岡部・高村眞夫・丸山晚霞らと花見へ行った思い出話のなかで登場し、〈岡部は小杉のところに居る〉〈花枝寒は、日本趣味豊かな水彩画家であった。彼は源氏物語五十四帖を描きたいと言っていたが、果してそれを描きのこしたかどうか分からない。〉〈この友人たちにも遠ざかっているうち、（中略）岡部花枝寒も、つづいて故人となっていた。〉と書かれていたのです（『明治会見記』理論社、1960）。

小杉自身にも花枝寒が登場する著作や作品があります。例えば、『陣中詩篇』（高山房、1904）の友人たちを想う詩「寝ざめ」の「薄手盃手に受けて花枝寒独りもの云はぬ」という一節、絵巻《うさぎ帖》（1909年、茨城県近代美術館蔵）には正月の宴会で〈加藤青花主となり 岡部花枝寒 副となり兎の皮を剥ぎ兎の肉を割く〉との讚があり、『漫画と紀行』（博文館、1909）では〈金洞山に向ふ、昨日来た友の花枝寒と山中で会し筈と期して居る。〉〈友人の花枝寒は旧御殿に泊った（中略）夜になって遊びに行く、二人枕を並べて話し乍ら寝る。（中略）雨ならもう一日泊らうと決して、花枝寒と二人近所を写生して歩く〉として登場し、〈くわしかん〉のルビが振られています。

花枝寒その人の著作としては、『天鼓』13号（1905.10）への〈鯛やちよるちよる流夏木立〉、『方寸』1巻2号（1907.6）への〈夫を待つ蘆間の舟の

蚊遣かな〉〈蚊遣して眠る乞食や河の音〉といった俳句を確認できます。

その経歴については詳細不明ですが、手がかりはあります。放菴には10歳ほど年上の「清彦」という友人がいました。彼は洋画家山本芳翠に学んだ後、各地を放浪し、放菴が少年時代の頃、五百城文哉のとこりに居候していたといい、1921（大正10）年2月に亡くなっています（放菴未醒抄「遊歴画家の日記」『アトリエ』1925.3）。山本芳翠には「岡部清彦」という門人がいた記録が残っており、あくまで推測の域を出ませんが、この岡部清彦が「花枝寒」と号していたのではないかと当館では考えています。

01030073

沼辺強太郎

《大猷院・仁王門》

明治後期 紙/水彩 46.0×33.0 cm

平成20年度購入



**解説：**沼辺強太郎（ぬまべ・きょうたろう、1869—没年不詳）は明治2年12月30日（陰曆）、現在の宮城県仙台市に生まれた洋画家。号に〈陸沈〉。上京後、小山正太郎主宰の画塾不同舎に入門。1893（明治26）年の第5回明治美術会展に墨画の《景色写生》3点を出品。1904（明治37）年に3ヶ月間、富山県の魚津中学で図画教員（教諭心得）として勤務。その後太平洋画会に参加し、1907（明治40）年東京勸業博覧会へ、日光に取材したと思われる《杉並木》を出品しています。同門の吉澤儀造の葬儀関係の書類に沼辺の名があり、吉澤と交友があったようです。

明治後期には、日光で外国人観光客向けの土産絵を描いており、小杉放菴が次のように証言しています。

〈沼辺氏は短軀瘠身、大層な酒好き、利害の心まことに淡泊、日光町の旅館に下宿して、例の外人向けの水彩画を作つて居たとき親しくなつた、旅館の主人隣の顔役であつたが、これが沼辺老の人物をことごとく尊信して、下にもおかぬ待遇であつた、売り絵の水彩を作るにあつて、沼辺老の態度、ほんとの油絵と少しもちがはず、明暗色調、如法の正確を得ざれば筆を措かず、此点誰も感心をした、私も感心したが其如くには行かなかつた〉（「不同舎の人々」『隨筆 帰去来』洗心書林、1948）

この頃、〈しゅせん〉という雅号を用いていたと伝わっており、当館でも所蔵している「S.Numabe」サインの水彩画も、沼辺強太郎の作ではないかと考えています。

小杉放菴は、1905（明治38）年に〈沼辺陸沈或夕来りて、折りしも新たに栽えたる純白の百合を見て、君が意気も稍々退転の芽ざしを現はしぬと云ひしが、去る事もあるかしと思ひしのみ、日々筆に飽いて友も来らぬ折、独り小園に立ちて自ら栽えたる花共の或は蒼となり或は散り行くを点頭て眺むる事の、いかに淡く清き趣もて我を慰むるよ〉と、田端の自宅に沼辺が訪ねてきたことを書いており（『吾小園

『天鼓』12号）、この頃には沼辺は東京に戻っていたと考えられます。現在確認できる沼辺の最後の消息は、1914（大正3）年2月刊行の『現代日本美術家全録』（画報社）に記載された〈東京本郷区駒込神明町一四〉という住所です。

個人蔵

河久保正名

《大猷院・唐門》

明治後期 紙/水彩 34.2×50.2 cm

平成29年度寄託

**解説：**河久保正名（かわくぼ・まさな、1849年頃—没年不詳）は神奈川県生まれの洋画家。1876（明治9）年2月から大蔵省十三等官として出仕、この間に国沢新九郎主宰の画塾彰技堂で洋画を学ぶ。1881（明治14）年1月に愛知県東春日井郡（現・尾張旭市）の初代郡長林金兵衛の油彩肖像画を制作。同年、大蔵省を辞して画業に専念するようになり、1883（明治16）年に油絵肖像画制作の広告を新聞へ出す。昭和女子大学に残る《鈴木重嶺像》はこの時代の作である可能性があります。

1885（明治18）年に東京で私立の画塾勸画学舎を開設。東京都公文書館の残る設置願から、この時点で数え37歳であったこと、本籍が麹町区一番町二十九番地であったことが判明しています。1887（明治20）年に東京府工芸品共進会へ《日光陽明門》《裏見瀧》を出品しており、このとき日光との繋がりが出来たか。観画学舎は1894（明治27）年未まで続き、若き丸山晚霞や石川欽一郎、後の陶芸家板谷波山のほか、小舟妙吉、中山利壽、寺尾宗助といった門下生がいました。この間に妻からの感化でクリスチャンとなり、1890（明治23）年に描画手習い本『日曜学校用福音図解』を出版しています。

勸画学舎を閉じると同時に大蔵省印刷局へ出仕するようになり、この間に明治美術会や日月会に参加。1900（明治33）年パリ万国博覧会へ出品し、翌年にはトモエ会の結成に参加。1902（明治35）年の第5回国内勸業博覧会出品の《海岸燈台之図》は住友吉左衛門に購入され、現在泉屋博物館所蔵となっています（野地耕一郎「河久保正名と油彩画《海岸燈台ノ図》について」『泉屋博物館紀要』38巻2023.1）。

画家石井栞亭は、大蔵省印刷局に勤めていたときに同僚の河久保から影響を受けたと『栞亭自伝』（第三書院、1934）に書き残しています。さらに、間もなく印刷局を退職した河久保は、日光に転居して、陽明門や神橋など外国人のお土産向けの水彩画を描いて晩年を送つたと続けています。水彩画家小山周次の証言によれば、1904（明治37）年頃、河久保は日光の鬼平に寄宿して土産絵を描いていたそうです（『日本の水彩画2 小山周次』第一法規出版1989）。

その後、河久保は太平洋画会の第5回展（1906年）に《杉蔭》を、第6回展（1908年）に《杉の森》を出品していますが、これらは日光の風景だったのかも知れません。現在確認できる最後の消息は、1914（大正3）年に刊行された『日本基督教徒名鑑』（中外興信所）の記録で、河久保は日本真光教会の委員、住所は日光町入町四軒町として記載されています。

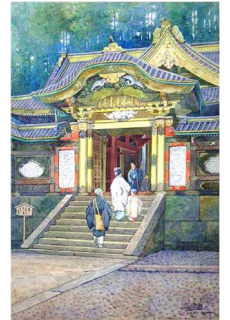
01030043

田淵保

《大猷院・唐門》

制作年不詳 紙/水彩 49.1×32.3 cm

平成9年度寄託



**解説：**当館では長年〈Tabuchi〉サインの謎の画家でしたが、近年の調査でようやく田淵保（たぶち・たもつ、1872—没年不詳）という画家だと判明してきました。『和歌山県人材録 前編』（和歌山日日新聞社印刷部、1920.11）によれば、田淵保は明治5年和歌山県那賀郡東野上村下佐々（現・海草郡紀美野町）出身。〈青波〉と号す。兄に実業家の田淵知秋。数え14歳で京都府画学校に入学。『日本水彩画沿革陳列目録』（1916年）の略歴からとくに田村宗立に学んだと考えられますが、後身にあたる京都市立芸術大学の『百年史』（1981年）卒業生名簿に名前が無いため、中退したと推測されます。

後藤直彦という人物の知遇を受けて上京、1891（明治24）年10月に五姓田義松の内弟子になるも一ヶ月ほどで破門され（『明治の宮廷画家五姓田義松』神奈川県文化協会、1986）、翌年、明治美術会教場生となって第4回展へ墨絵の《秋景》を出品。その後、原田直次郎主宰の画塾・鍾美術館に入門。1895（明治28）年の明治美術会第7回展では、原田門人として3点の水彩画《不忍弁天》《不忍夕景》《亀戸天神》を出品しています。

間もなく独立して、1895～1896（明治28～29）年頃に『大阪毎日新聞』のポンチ絵を担当。1903（明治36）年1月、画家原撫松の紹介で小川一眞の写真に着色する仕事を少なくとも半年ほど続けました（丹尾典興「原撫松の日記1」『一』87号2021.12）。後輩や友人たちが次々に欧州留学を果たすなか、金銭的にそれが難しい自身の境遇を恨み、明治30年代半ばに日光へ移り、土産絵や依頼による肖像画を制作して行くようになります。その後の展覧会への出品としては、1908（明治41）年の第7回トモエ会展への《日光写生》という記録を確認でき、画商もやっていたという証言もあります（明残老「横浜絵物語」『武相研究印象記』武相文化協会1949）。現在確認できる最後の消息は、1912（明治45）年夏に、日光で病氣療養中だった思想家田岡嶺雲が新聞へ発表した日記随筆です。ある日、田淵が訪問してきて10年ほど日光で制作していることなど聞いたという記述があります（『田岡嶺雲全集』第6巻、法政大学出版局2018）。

岸田劉生と三宅克己による次の証言に登場する画家は、この田淵保と同一人物と考えられます。

〈〔銀座に〕荒井真画堂という、これも額や洋画を売る店がある。（中略）日光で知り合いになった、田淵さんという風流な仙骨を帯びた古い水彩画家の画がよくこの店にあり、その後この主人とも知り合いになり、よく田淵さんの噂をしたものだ〉（岸田劉生「新古細句銀座通」『東京日日新聞』1927年連載）

〈銀座の真画堂がまだ先代の時代で、私は極めて些少な画料でその店に頼まれて、絹地に水彩画を描いたり、また写生画を売ったりしたこともあった。この時友人田淵保君の紹介で横浜元町の山越井という画商に、写生画を売ることがを試みた〉(三宅克己『思ひ出るまま』三宅書房 1936)

01030033

吉田 博

《杉並木》

1894-1899 (明治 27-32) 年頃

紙/水彩 50.2×68.2 cm

平成 12 年度購入



個人蔵

吉田 博・ふじを

《五百城文哉宛葉書》

1906 (明治 39) 年 1 月元日付

紙/印刷・インク 8.7×13.7 cm

平成 29 年度寄託

**解説:**吉田 博(よしだ・ひろし、1876-1950)は、小杉放菴が画家となるきっかけを作った洋画家でした。現在の福岡県久留米市に生まれ、1894(明治 27)年に東京の画塾・不同舎へ入門した吉田は、1899年に仲間たちと渡米し、米国各地で開催した水彩画展で大成功を収め、帰国後は 1901(明治 34)年 7 月中旬に帰国。翌年、明治美術会を解消発展させた太平洋画会の設立にあたり中心的役割を果たしました。その後は 1936(昭和 11)年に日本山岳画協会を設立。1947(昭和 22)年には太平洋画会会長となり、風景画家の第一人者として永く活躍しました。

日光へは何度か写生旅行で訪れており、若き小杉放菴と出会ったのは、吉田が初渡米する少し前のことでした。吉田に対抗してカンパスと絵具箱をもって大谷川を上るなど、吉田から強い刺激を受けた小杉は、同じ画塾で洋画を学ぶことを決意します。入門に際しては、吉田風の絵画作品《中禪寺の紅葉の図》を持参していったそうです。

吉田博の《杉並木》は、この時期に描いたと思われる、日光の杉並木を扱った水彩画で、遠方の空気へ消えゆく杉の連なりによって遠近感が強調されています。不同舎が得意としたこの手法は、当時「道路山水」と称され、「道」にポイントを置き、特別な名所ではない、ありふれた風景を絵画化していくことで、それまでの日本にはない、新しい風景画の視点を開拓していききました。

五百城家には、滞米中の吉田博とその妻ふじをから届いた 1906(明治 39)年 1 月元日付の年賀状が伝わっています。吉田夫妻は 1903(明治 36)年 12 月から渡米しており、ボストンからこの年賀状を投函したことがわかります。吉田夫妻にとって、五百城文哉は米国からわざわざ年賀状を送るほどの存在であったことがうかがえますが、どのような関係だったのかははっきりわかっていません。吉田ふじをも、博が最初の渡米をしたときに小杉放菴に連れられて日光へ遊びに行ったことがあり、こうした機会に夫妻と

も五百城の知己を得ていたのではないかと考えられます。

01030056

丸山晚霞

《東照宮・鳥居》

1900 (明治 33) 年頃 紙/水彩

25.6×34.5 cm 平成 12 年度購入



個人蔵

丸山晚霞

《五百城みつ宛葉書》

年不詳 1 月 1 日付 紙/水彩

14.0×9.0 cm 平成 29 年度寄託

**解説:**丸山晚霞(まるやま・ばんか、1867-1942)は現在の長野県東御市に生まれた洋画家。本名:健作。10 代後半のときに初上京し、河久保正名が主宰する観画学舎で洋画を学ぶ。1888(明治 21)年に再上京して本多錦吉郎主宰の彰技堂で学び、1890(明治 23)年の第 3 回内国勲業博覧会に油彩画を出品。この年、故郷福津村の菩提寺・定津院の住職から〈晚霞天秀〉の居士号を授かり、以後号を(晚霞)、印に〈天秀〉を用いる。1895(明治 28)年群馬県沼田付近で写生中の吉田博と出会い、水彩画に関心をもつ。1900(明治 33)年満谷国四郎・河合新蔵・鹿子木孟郎と渡米、先発の吉田博・中川八郎と合流し、この 6 人で米国各地で水彩画展を開き、大成功を収める。1901(明治 34)年満谷・河合・鹿子木と渡欧、欧州各地を巡遊した後、同年秋に帰国。1902(明治 35)年太平洋画会創立に参加。この年帰郷し、三宅克己の後進として小諸義塾図画教師を務める。1905(明治 38)年小諸義塾を辞して上京、大下藤次郎らと水彩画講習所を設立。1907(明治 40)年水彩画講習所を移転新築した日本水彩画会研究所の主任教授となり、同年秋の第 1 回展に出品。翌年も連続入選するも、以後同展へは出品しませんでした。1911(明治 44)年再渡欧し、英国を中心にスイスなど各地を巡遊。1913(大正 2)年日本水彩画会創立の発起者となり、創立後は評議員として、同会展での作品発表を続けました。1936(昭和 11)年吉田博らと山岳画協会設立に参加。

《東照宮・鳥居》は、日光東照宮の入口である石鳥居から、赤い表門の方角を向いた景色を描いています。晚霞は明治 30 年代に日光に滞在し、五百城文哉や小杉放菴と共に土産絵を描いていたことがあったようです。日光出身の俳人・村上梅信が、自身の少年時代の記憶として、次のように語っています。〈先生〔丸山晚霞〕は慥か四十年前の明治三十四五年頃私の郷里日光町稲荷川東岸にある萩垣面の梅屋敷といふ処(移転前の稲荷町旧地)にあった五百城文哉の洋画塾の塾生だった国府浜国太郎(小杉放菴先生)等と共に筆を競はれて居りそれらの彩画が土地の画商鬼平の店頭を飾つてゐた事を私の幼い記憶に今も尚映つてゐる(小山周次編『水彩画家丸山晚霞』日本水彩画会 1942)。これは、晚霞が渡米準備をしていた 1899(明治 32)年頃のことではないかといわれています(『丸山晚霞と日本の水彩画の流れ』長野県

信濃美術館 1998)。五百城家には、大正期に文哉の未亡人へ送られた晚霞からの年賀状が伝わっており、文哉と晚霞の付き合いが深いものであったことがうかがえます。

日光の画商・鬼平(現在は羊羹屋)のもとへは、自身の弟子である小山周次を寄寓させるなど、深い繋がりがあったようです。また、晚霞は〈其当時〔明治 30 年代〕吉田博、三宅克己の両氏や自分も、描いた画を横浜の某店に頼(すこぶ)る安価で売り、それにて生活をして居たのである〉(『日本水彩画史』『アトリエ美術大講座 水彩画科 第一巻 基礎学』アトリエ社 1936)とも語っており、水彩画の販路は日光だけでなく、横浜などにもあったことを伝える、明治後期の土産絵需要を考えるうえで貴重な証言となっています。

01030047

ウォルター・ティンデル

《日光の庭園》

1909 (明治 42) 年頃 紙/水彩

25.7×36.1 cm 平成 9 年度購入



**解説:**ウォルター・ティンデル(Walter Tyndale, 1855-1944)はベルギー生まれの水彩画家、イラストレーター。アントワープの大学で学んだ後、パリで画家レオン・ボナの指導のもと働く。その後は主にイギリスで活躍した。1905~1934 年にかけてロイヤル・ソサエティによる展覧会や、1912~1924 年にレイチェスター・ギャラリーでの展覧会へ出品しています。モロッコ、中東、イタリアのシチリア島、そして日本を旅しました。

日本を訪れたのは 1900 年代頃と考えられます。庭園を描くことが目的であったようで、1910 年に出版した紀行文『Japan and the Japanese (日本と日本人)』や、1912 年に刊行された友人の著書『Japanese Gardens (日本の庭園)』には、日本旅行時に描かれた、日本の庭園を中心とする美しい挿絵が多数挿入されています。

《日光の庭園》は、後者の本にカラー図版として掲載されている水彩画です。日光で世話になった個人宅の庭園のようですが、大きな岩が多くある景観はロックガーデン風にも見えます。この頃、日光でロックガーデンといえれば、五百城文哉邸の庭か、設立時は佛岩にあった東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園しかありませんでした。さてティンデルは一体、どこの庭園を描いたのでしょうか。



## 五百城文哉 年譜

〔凡例〕

※本年譜は、寺門寿明氏編『五百城文哉略年譜』『甞る明治の洋画家 五百城文哉展』東京ステーションギャラリー(2005)を基に、出典\*を調査し改めて作成したものです。※年齢は数え年/満年齢

### 1863(文久3)年 1歳/0歳

6月27日、水戸藩士の父、五百城縫殿之介親英と母・俊の子として、水戸金町(現在の水戸市金町三丁目、五軒小学校南側、国道118号に面したあたり)に生まれる。本名は熊吉(後に文哉へ改名)。

母は、五百城茂太夫親方の長女。熊吉の名は、祖父にあたる親方の幼名を継いだものか。父は、岩瀬介左衛門長政の二男。五百城家に男子がなかったため俊と結婚して養子となる。直道と名乗った後、五百城家代々の「親」の名をとり、親英へ改めた。夫婦には三男三女(一説には二男四女)があり、文哉はその末子だったが、上の三人が早世したため、姉二人との三人姉弟となり、戸籍のうえでは、文哉は長男となっている。そのため、『文哉詩鈔』では〈二女一男〉とされている、長女の名は仲、二女は辰といい、二人とも静岡県士族に嫁いでいる。

\*『五百城文哉』水戸市立博物館 1983年 p.39の戸籍謄本調査/寺門寿明「評伝・五百城文哉」『五百城文哉展』水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館 2000) p.17

この年、母方の祖父・五百城茂太夫、没。  
\*寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.354

### 1868(慶応4)年 6歳/5歳

3月18日、父・親英が水戸藩内の抗争下、反対派の天狗党に殺害される。  
\*特集「藝文風土記 遊歴の画人・五百城文哉」『常陽藝文』111号 1992.8 p.5の「諸生党名簿」調査

### 1873(明治6)年 11歳/10歳

この頃、上市五軒町小学校(現・水戸市立五軒小学校)に入学。同級生に小林元茂・浅田多實・天田勇・美濃部久成・野村正順・増田干信など。のち新屋敷小学校との合併により、朝比奈知泉・水谷定之助・湊兼吉(仁右衛門)・中田平吉らが新たに同級生となる。教師の佐々木香窓から漢籍や詩文を教わるか。

\*渡邊刀水「増田干信の『野路村雨』(四-五)」『伝記』6巻 11-12号 1939.11-12

### 1875(明治8)年 13歳/12歳

5月7日、「学業勉勵進歩」により、史略一冊を茨城県から下賜される。  
\*茨城県賞状(当館寄託) = 『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.40 図版掲載  
12月22日、下等小学第一級卒業試験で優秀な成績を修める。当時の制度は、下等上等各8級ずつの段階があり、8年かけて卒業するのが標準だった。  
\*茨城県賞状(当館寄託)

### 1878(明治11)年 16歳/15歳

12月17日、教員不足により、上等の途中で小学校を退学。准小学二等授業生に任じられ、母校の教壇で下級生を教える命を受ける。  
\*茨城県辞令(当館寄託)

### 1879(明治12)年 17歳/16歳

5月、地理局から山林課が分離独立。  
11月19日、二等授業生の職を辞する。  
\*茨城県辞令「依頼職務差免候事」(当

館寄託)

### 1881(明治14)年 19歳/18歳

2月、朝比奈知泉が上京。五百城も近い時期に上京か。のち本郷金助町にあった共同借家住居で共同生活を送る。  
\*朝比奈知泉『老記者の思ひ出』中央公論社 1938 p.5

この頃(〜1883年)、高橋由一(天絵学舎)に入門し、由一や高橋源吉に洋画を学ぶ。同門の安藤伸太郎、原田直次郎と交友する。

\*本多錦吉郎『追弔記念洋風美術家小伝』1908/五百城の上京時をよく知る朝比奈知泉が、〈五百城は上京して洋画を高橋由一翁に学び出藍の誉れあり〉と記述している(『朝比奈知泉文集』同文集刊行会 1927 p.187)。

4月、新設された農商務省に山林局が設置される。

### 1884(明治17)年 22歳/21歳

3月3日、天絵学舎が廃校となる。  
\*青木茂編『高橋由一油画史料』中央公論美術出版 1984 pp.187-188

天絵学舎廃校後、小山正太郎の私塾(不同舎として本格始動する前身)で安藤伸太郎や長原孝太郎らと共に学ぶ。

\*中村不折〈その頃長原君は安藤伸太郎君や五百城文哉君と云った人達と一緒に小山正太郎先生の塾に学んでいました。僕は明治20年に信州から出て、矢張小山先生の塾にはいりましたが、其の時はもう長原君は塾を去っていました。何でもなにか事件があって先生と衝突し、安藤君の配成で皆んなが袂を連ねて立去ったのだとか云ふ事でした。〉(『故長原孝太郎追悼』『美術新論』1931.1) /太田耕治「長原孝太郎氏の口述伝」『美術新論』1931.4 p.171

5月7日、農商務省山林局の雇となり庶務課に勤務する。

\*山林局辞令(当館寄託) = 『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.41に図版掲載

これは、万国森林博覧会参加にもなる高島北海(当時、農商務省六等官・山林局事務取扱)の英国出張と入れ替わるようなタイミングであり、高島が関わっていた田中壤・丸山宣光との全国植物調査に生じた穴を埋める役割として、五百城が雇用されたか。高橋由一門における先輩であった田中の推薦であった可能性が高い。

5月、大日本山林会通常会員となる。

\*「会員姓名 五月中加入ノ分」『大日本山林会報告』28号 1884.6 p.363

9月14日、山林局から「除服出仕申付候事(本来の服喪期間より早く出勤させること)」辞令が発行されているため、この頃近親者が亡くなっている。  
\*山林局辞令(当館寄託)

### 1885(明治18)年 23歳/22歳

10月、山林産物展覧会(大阪府博物館)に『針澗樹林木炭画大額』2面を出品。  
\*『大日本山林会報告』41号 1885.7 pp.363-366

### 1886(明治19)年 24歳/23歳

3月4日、農商務省十等官へ昇進し、山林局勤務を命じられる。

\*農商務省辞令(当館寄託)  
5月10日、農商務省属となる。  
\*農商務省辞令(当館寄託)

### 1887(明治20)年 25歳/24歳

3月25日〜5月25日、東京工芸品共進会(上野公園)に風景画を出品?  
\*本多錦吉郎『追弔記念洋風美術家小伝』1908に〈東京府工芸品共進会に出陳せし田舎道の如き当時の作なり〉とあるが、『東京府工芸品共進会出品目録』上巻(有隣堂 1887)に五百城の出品を確認出来ない。隈元謙次郎が『近代日本美術の研究』(大蔵省印刷局 1964)などでしばしば五百城が同会に風景を出品

したと書いているが、その出典は『追弔記念洋風美術家小伝』ではないかと思われる。

8月19日、農商務省から「除服出仕」辞令が発行されているため、この頃近親者が亡くなっている。

\*農商務省辞令(当館寄託)  
この年、田中壤が全国植物調査の成果をまとめた『校正大日本植物帯調査報告』(農商務省)を刊行。図表編に五百城が描いた《山毛櫨帯中の景》《白檜帯中の景》が掲載される。  
\*復刻版:大日本山林会 1998

この年、守田兵蔵、秋田県阿仁鉱山から栃木県足尾銅山に転任。この頃、日光に住み始めるか。  
\*『壬生のサムライと日光の至宝』壬生町立歴史民族資料館 2013 p.97

### 1888(明治21)年 26歳/25歳

11月、『大日本山林会報告』81号、楓の種類別葉形に関する質問への回答に、五百城が写生した図が掲載される。

### 1889(明治22)年 27歳/26歳

2月11日、大日本帝国憲法発布。これにより幕末維新期の国事殉難者に対して贈位が実施され、藤田東湖に正四位が贈位される。

3月、有志からの依頼で《藤田東湖像》を水戸常磐神社へ奉納。漢詩も詠む。  
\*《東湖先生画像記》当館寄託/漢詩は、川崎胤春編『蔦蔦集』常陽社 1889.12に収載。

この作品は、1945年8月2日の水戸空襲により焼失した。

\*飯野農夫也「五百城のこと(3)」『ておん』9巻7号 1963.2 p.6

3月、印刷物《東湖先生肖像》を発行する。この時の住所は〈下谷区二長町〉。

\*『明治二十二年三月 出版書目』月評社 1889.8

5月18日、大蔵次官であった郷純造が、自身の別荘である随意荘で開いた退職記念の宴に出席したか。この宴に合わせて刊行された『随意荘雅集録』に、五百城も祝文を寄せている。

\*井上孝榮「『随意荘雅集録』考」『書論』42号 2016.8

7月9日、陸殺判任官九等へ昇進する。  
\*農商務省辞令(当館寄託)

9月、栗本鋤雲・内藤隼叟ら水戸藩出身者による「江戸会」の名簿に、朝比奈知泉と共に名前が掲載される。

\*『江戸会誌』1巻2号 1889.9 p.79

9月21日、埼玉県巡回を命じられる。  
\*農商務省辞令(当館寄託)

12月11日、野口勝一(『絵画叢誌』の主宰なども務めたジャーナリスト、政治家)を訪ねる。数日後に野口へ手紙を出し、20日に届く。  
\*『北茨城市史 別巻7 野口勝一日記Ⅲ』北茨城市 1993 p.143, 145

### 1890(明治23)年 28歳/27歳

4月1日〜7月31日、第3回国勸業博覧会(上野公園)に《元禄時代花見図》《河原あそびの図》を出品し、前者で褒状を得る。目録ではこの時の五百城の住所は東京市下谷区二長町(現・台東区の一部)となっている。  
\*同博賞状 = 『五百城文哉展』(東京ステーションギャラリー-2005) p.194に図版掲載/『国内勸業博覧会美品出品目録』中央公論美術出版 1996 p.235

4月17日、農商務省を依頼退職する。  
\*農商務省辞令(当館寄託) = 『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.41に図版掲載

その後、東京を離れ、新潟方面を旅する。現在の新潟県上越市頸城村村の山田家(当主は山田辰治)の世話になる。  
\*村山吉廣「五百城文哉の生涯と詩業」『斯文』111号 2003.3/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.338

後年、小杉放菴が偶然山田家を訪れ、同家に残されていた五百城の漢詩や、油彩画《春日山春景図(桃源図)》を発見し、譲り受ける明治23年の年記がある。現在、栃木県立美術館蔵。

\*放庵未醜抄「遊歴画家の日記」『アトリエ』2巻3号 1925.3

### 1891(明治24)年 29歳/28歳

2月10日、吉本水枝と結婚。水枝は東京府佐原郡大井村の吉本知蔵の二女。  
\*寺門寿明「評伝・五百城文哉」(『五百城文哉展』水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館 2000) p.22の戸籍謄本調査

春頃、水戸に帰り10月まで滞在する。この間は千波湖を見下ろす高台、五本松(現・備前町)にあった松琴亭(水戸の豪商富田菊三郎の別邸)で過ごしたか。滞在中、何人かの肖像画を描く。  
\*『文哉詩鈔』/寺門寿明「五百城文哉一人と作品一」(『五百城文哉』水戸市立博物館 1983年 p.45/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) pp.338-339

7月26日付『茨城日報』付録に、五百城の描いた戸田忠太夫、安島帯刀、会沢恒蔵の肖像(線画)が掲載される。  
\*水戸市立博物館蔵/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.339

10月、太田、大子方面への旅に出る。太田に約2ヶ月滞在し、12月に袋田へ到り、翌年にかけて《桜岡八郎肖像》《桜岡多八郎肖像》《佐藤伝治兵衛肖像》《桜岡源次右衛門肖像》《桜岡敏肖像》を描く。《袋田の滝》もこのとき制作か。大子町で年を越す。旅の途中で、土地の名士の肖像を数多く描き、大子町では《島根政兵衛肖像》《石井良庵肖像》を描く。太田町で後に妻となる打越みつと知り合うか。

\*『文哉詩鈔』/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) pp.336-343

### 1892(明治25)年 30歳/29歳

春、大子町から現在の矢祭町方面を巡るも、寒さが厳しいため引き返し、再び太田を経由して3月に水戸に戻る。  
\*『文哉詩鈔』/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007)

4月7日、新聞『日本』で、五百城がシカゴ万博へ陽明門を描いた油彩画を出品すると報じられる。同様の記事が同年29日刊行の『閣竜世界博覧会記事』7号にも掲載され、ここでは〈過日日光に赴き〉と報じられている。

4月27日、熊吉を改め文哉を正式に本名として届出る。

\*寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.344の戸籍謄本調査

6月、太田町で天然痘が流行し、患者救済のため1円を寄付する。

\*寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.345

6月、水戸から日光へ向かう。出発前に、友人たちが松琴亭で送別会を開いてくれる。日光へは打越みつを同伴か。

\*『文哉詩鈔』/寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.344

6月12日、日光東照宮に、陽明門の撮影を申請する。

\*山作良之「明治時代における日光東照宮の境内撮影」『全国東照宮連合会々報』45号 2011.12

この頃、日光で《日光東照宮陽明門》を描く。足場を組んで長期写生しているうちに、地元の人から日光風景のジオラマを頼まれ、これは実現しなかったものの、長逗留することになり、そのまま日光に住む。

\*小杉放庵「萩垣面」『故郷』龍皇閣 1957



しばらくは、小杉放菴の実父である小杉富三郎邸の離れ、華族の別荘など、仮住まいを転々とする。

\*『文藝詩鈔』小杉放菴「我が修業時代（十三から二十三歳まで）」「新若人」2巻7号 1941.10

## 1893 (明治 26) 年 31 歳 / 30 歳

3月、『大日本山学会報告』123号 p.60の会員府県別住所姓名一覧に、住所が〈本郷区本郷三丁目廿三番地〉と掲載される。まだ同会に住所変更を伝えていなかったか。

この年(5月以前)、国府浜国太郎(12歳)の小杉放菴が実父に連れられ、五百城に弟子入りする。この時、五百城は二荒山神社宮司(松平容保)の油彩画肖像を描いていた。以後、国太郎は通いで絵を学ぶ。

\*小杉放菴「我が修業時代(十三から二十三歳まで)」「新若人」2巻7号 1941.10/小杉放菴「萩垣面」「故郷」龍星閣 1957/小杉放菴「問われるまに(3)」「朝日新聞」1962.6.4 p.5

4月4日、妻・水枝との離婚届出。  
\*寺門寿明「評伝・五百城文哉」(『五百城文哉展』水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館 2000) p.22の戸籍謄本調査。小杉放菴は五百城と出会った時から妻はみつだったと述べており、日光に来る前に水枝とは別居していたか。

5月1日~10月30日、シカゴ・コロンブス万国博覧会に《日光東照宮陽明門》を出品?出品目録では確認出来ず。本作は、水戸の豪商・富田家に蔵されて後、茨城県に寄贈され、県庁舎内に掲げられていたが、1945年8月2日の水戸空襲により焼失した。

\*飯野農夫「五百城のこと(3)」「てんおん」9巻7号 1963.2 p.6

この年、油彩画《男の肖像》を制作。  
\*1970年度に茨城県美術博物館が購入、現・茨城県近代美術館蔵(『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.47

## 1894 (明治 27) 年 32 歳 / 31 歳

4月、松村任三『日光山植物目録』(敬業社)刊行。  
7月6日、高橋由一、没。

## 1895 (明治 28) 年 33 歳 / 32 歳

年初めから夏にかけて、水戸から茨城県北部の多賀地方に向けて旅する。その途上、日立、高萩、平潟などで名士の肖像を描く。その後、西方の花園山を越えて帰路に就く。

\*『文藝詩鈔』/寺門寿明「評伝・五百城文哉」(『五百城文哉展』水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館 2000) pp.23-24

4月、小杉放菴が栃木県尋常中学校(現在の宇都宮高等学校)に入学。宇都宮市鶴田の同校寄宿舎に入るため、師弟関係がいったん中断となる。

\*寺内恒夫「小杉放菴略伝」『栃木史論』3号 1969.12 p.1の栃木県尋常中学校学籍簿調査/不同舎へ提出された小杉放菴履歴書複写(東京文化財研究所蔵)

この頃、御料地監守長だった小杉富三郎の世話により、日光町萩垣面に居を構える。

\*石川正次「小杉放菴の原風景」文芸社 2000 p.116は1896(明治29)年中頃と推測している。

この頃、避暑に来る宮殿下らのために、日光町を代表して贈る写生画を町から頼まれる。日光山の草花が良いと考え、描いた後、松村任三らにその植物の名を確認して贈呈したところ、たいへん褒められる。これをきっかけに登山しては花を採集し、描くようになる。

\*五百城文哉「高山植物園の由来」『園芸界』1年3号 1904.12

この年、上野桐恵(濱島茂)、13歳で日光の守田兵蔵の元に身を寄せ、五百城文哉に洋画を学ぶ。

\*『壬生のサムライと日光の至宝』壬生町立歴史民族資料館 2013 p.31

この年、守田兵蔵が日光の自邸に、絵画や日光堆朱などの美術工芸品を陳列する「鍾美館」を開設する。

\*『壬生のサムライと日光の至宝』壬生町立歴史民族資料館 2013

## 1896 (明治 29) 年 34 歳 / 33 歳

3月、小杉放菴が栃木県尋常中学校を1年で退学して日光へ帰り、5月から五百城の内弟子となる。

\*不同舎へ提出された小杉放菴履歴書複写(東京文化財研究所蔵)

12月、元松岡藩主の中山信徴が日光東照宮宮司となる(～1912年まで)。

\*『官報』4051号 1896.12.28 p.21

12月28日、打越みつとの婚姻届出。みつは、茨城県久慈郡太田町木崎町で宿屋を営んでいた打越嘉重の長女。

\*寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」(『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.344の戸籍謄本調査

この頃、五百城の親戚に訴訟問題が起きたため、弁護を依頼した城数馬弁護士と宇都宮で会う。共通の趣味であった高山植物を通じ、終生の友となる。

\*五百城文哉「高山植物園の由来」『園芸界』1年3号 1904.12/五百城文哉「野生植物陳列会」『日本園芸雑誌』121号 1902.6/中山珠一「五百城文哉と城数馬の日光」(『日光近代学事始』随想舎1997)は、1887(明治20)年後に東京の漢詩を学ぶ会で出会ったとしているが、出典不明。

## 1897 (明治 30) 年 35 歳 / 34 歳

2月、小杉富三郎が日光町長を辞し、小倉山御料地監守長の職を解かれ、住まいを小倉山から丸美ヶ原へ移す。

\*石川正次「小杉放菴の原風景」文芸社 2000 p.127

4月14日、みつとの間に男子誕生、了一と名付ける。

\*『五百城文哉』水戸市立博物館 1983年 p.49の戸籍謄本調査/小杉放菴「瀧の尾」『故郷』龍星閣 1957

5月、了一の初節句のため、阿新丸・牛若丸の轍を描く。

\*当館寄託

初夏、英国人ジョン・ヘンリー・ディクソンが日光に五百城を訪ね、水彩画を購入する。

\*出口保夫「漱石と不愉快なロンドン」柏書房 2006 p.260

6月23日、長男の了一が生後2ヶ月余りで急逝してしまう。

\*『五百城文哉』水戸市立博物館 1983年 p.49の戸籍謄本調査/小杉放菴「瀧の尾」『故郷』龍星閣 1957

## 1898 (明治 31) 年 36 歳 / 35 歳

3月21日、自邸を購入・登記する。

\*須藤光二「日光に埋もれた明治の文化人 五百城文哉」『日光史談』1号 1990.2 p.30の登記簿調査

7月、城数馬から女峰山～太郎山での植物採集行に誘われるが、病で断る。

\*城数馬「女貌山と太郎山」『山岳』1巻1号 1906.4/中山珠一「五百城文哉と城数馬の日光」(『日光近代学事始』随想舎1997) p.139

8月から9月にかけての約1か月間、黒田清輝が日光に滞在し、『昔語り』を制作。安藤伸太郎からの頼みで、五百城が仲介、黒田は近くの高照庵に宿泊し、興雲律院の広間で制作した。

\*『蹄の跡(五)』『光風』2年3号 1906.6 p.62/『蹄の跡(六)』『光風』2年4号 1906.10 pp.49-50/長尾建吉「昔語り」『美術新論』2巻7号 1927.7 pp.86-87

このとき、小杉放菴と共に五百城のもとで書生をしていた郡司卯之助が、黒田清輝から勧められ、東京美術学校入学のため秋に上京する。

\*石橋財団ブリヂストン美術館ほか編『白馬会』日本経済新聞社

1996 p.150

この年、田母沢御用邸の新築工事に際し、守田兵蔵が小西喜一郎(小西旅館経営者)、高橋源三郎(実業家)と合同で「小松組」を組織。御普請御用を勤め、大谷石材多数を上納する。

\*『壬生のサムライと日光の至宝』壬生町立歴史民族資料館 2013 p.12,98

## 1899 (明治 32) 年 37 歳 / 36 歳

この頃、日光に來遊した吉田博に会って強い刺激を受けた小杉放菴が、五百城のもとを飛び出し上京。秋に一度帰ってきて出奔を詫言、その後再上京して、吉田と同じ小山正太郎の画塾不同舎に入門する。

この頃、五百城は〈山草の緻密な写生画の註文〉を水張りしたワットマン紙に描いていた。

\*放菴「破門の弟子」『アトリエ』5巻8号 1928.8

冬頃、小杉放菴が身体をこわして帰郷したため、避寒滞在できるよう茨城県磯浜の宿屋を世話する。放菴の体調は程なく回復。放菴はこれ以後数年の間、社寺の風景画を描くために、日光と東京を頻繁に往復する生活を送る。この宿は、明治初年から1991年まで大洗町の中心部・磯浜町の海岸よりで営業していた「旅館豊後屋」であったことが判明している。

\*寺門寿明「放菴と文哉、師弟の歳月—小杉放菴の回想「十三から二十三まで」を読む(下)」『耕人』11号 2005.5 p.158

この年、田母沢御用邸、完成。守田兵蔵邸(鍾美館)が、行幸時の儀仗兵宿舎として使用される。

\*『壬生のサムライと日光の至宝』壬生町立歴史民族資料館 2013 p.98

## 1900 (明治 33) 年 38 歳 / 37 歳

3月17日、自邸が建つ土地を購入・登記する。

\*須藤光二「日光に埋もれた明治の文化人 五百城文哉」『日光史談』1号 1990.2 pp.30-31の登記簿調査

春頃、茨城県の多賀地方を訪れる。現在の北茨城市平潟に油彩画を残す。

\*『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.47

7月、城数馬と共に、日光の女峰山で新種のランを発見する。和名「ニョホウチドリ(女峰千鳥)」と名付けられたこの花の学名には、牧野富太郎によって、城と五百城の名がつけられる。

\*牧野富太郎「日本植物調査報知 第二十七回」『植物学雑誌』14巻162号 1900 pp.183-185/T. Makino 「Observations on the Flora of Japan. (Continued from p.36.)」『植物学雑誌』16巻181号 1902 pp.49-60

8月、木下友三郎と共に女峰山で採集し、庭で栽培していたキバナノコマノツメを見るため、皇太子(後の大正天皇)が五百城宅を訪れる。皇太子の命により、これを写生し贈呈する。

\*城数馬「花卉ト旅行」『日本園芸界雑誌』109号 1901.6/五百城文哉「高山植物園の由来」『園芸界』1年3号 1904.12

11月、再び茨城県多賀地方を訪れ、平潟で実業家鉄伝七の別邸齋雲閣に滞在する。この頃、『平潟港』を描くか。

\*寺門寿明「評伝・五百城文哉」(『五百城文哉展』水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館 2000) p.24

11月24日、野口勝一、鉄伝七と三人で平潟諸勝を散歩する。

\*『北茨城市史 別巻8 野口勝一日記IV』北茨城市 1994 p.176

## 1901 (明治 34) 年 39 歳 / 38 歳

5月、福田たねが、五百城のもとに弟子入りする(1903年まで)。

\*柏村祐司「福田たね—青木繁出会の序章 福田たねを育てた人々—福田豊吉と五百城文哉」(『福田たね 青木繁のロ

マン」芳賀町総合情報館 2008) p.10 調査、不同舎へ提出された福田たね履歴書複写(東京文化財研究所蔵)

5月10日、野口勝一の記事に〈橋本繁来請添書于日光宮司中山信徴、因作之、且附寄五百城文哉書〉とあり。

\*『北茨城市史 別巻8 野口勝一日記IV』北茨城市 1994 p.195

5月12日、日光の五百城邸で、城ら愛好者による野生鑑賞植物90余種の陳列会が開かれる。この時、五百城邸の門に「コウサイカ」の札がかかっていた。

\*城数馬「花卉ト旅行」『日本園芸界雑誌』109号 1901.6

8月、日光の商品陳列所である鍾美館と契約か。

\*『鍾美館絵画出品目録』当館寄託

8月末から9月半ばにかけて、牧野富太郎(帝国大学理科大学助手)が日光を訪れ、五百城宅に滞在する。この間に牧野は五百城と共に植物の採集を行なう。この間に、牧野を訪ねてきた武田久吉とも親しくなる。

\*武田久吉「日本山岳会の創立と小島鳥水君」『山岳』44年1号 1949.4/武田久吉「明治の山旅」創文社 1971/小松みち「五百城文哉と牧野富太郎の交友—牧野文庫所蔵資料から見る—」(『見聞の百花譜—五百城文哉の植物園』小杉放菴記念日光美術館 2003) pp.28-29

冬、日光の《赤松家当主肖像》を描く。

\*画面右上に〈文哉写 明治卅四年冬日〉とあり。現在、小杉放菴記念日光美術館寄託。

この年、五百城文哉・城数馬・松村任三(東京帝国大学小石川植物園園長)によって、東京帝国大学付属植物園の日光分園の設置について相談が行われ、日光東照宮宮司中山信徴の協力を得、東照宮が所有していた佛岩の土地を得ることが決定する(このうち五百城、松村、中山の三人は水戸藩出身)。分園設置は、五百城の庭に松村が驚いたのがきっかけだった。

\*寺門寿明「日光植物園の創設と三人の水戸藩士—五百城文哉、松村任三、中山信徴」『耕人』10号 2004.5/西村公宏「創設期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について」『ランドスケープ研究』78巻5号 2015.3

この年、日本園芸会、設立。城数馬が理事となる。『日本園芸会雑誌』創刊。

## 1902 (明治 35) 年 40 歳 / 39 歳

年初から寒さを避けて静岡県沼津に滞在する。

\*五百城文哉「野生植物陳列会」『日本園芸会雑誌』121号 1902.6/寺門寿明編「五百城文哉略年譜」(『五百城文哉展』東京ステーションギャラリー—2005)は、この滞在は沼津に住んでいた五百城の姉の手配によるものと思われ、この間少くとも2月には小杉放菴も沼津を訪れているとしている。

4月、沼津からの帰途、東京にて城数馬と、新宿御苑他諸家の温室を見る。

\*五百城文哉「野生植物陳列会」『日本園芸会雑誌』121号 1902.6

この時、城数馬・木下友三郎・田島巴と、愛育する植物の陳列会を同好者たちで開く約束を交わす。山草会の発端。

\*木下友三郎「園芸一話」『園芸界』1年1号 1904.10

5月3日、上京。城数馬と4日夕方まで野生植物陳列会の陳列作業を行なう。

\*五百城文哉「野生植物陳列会」『日本園芸会雑誌』121号 1902.6

5月5～6日、五百城・城数馬・木下友三郎の主催による野生植物陳列会が、東京本郷団子坂下の薫風園において開催され、牧野富太郎、武田久吉、古川氏らも出品する。山草好きの4人の子爵(松平康民、加藤春秋、久留島通簡、青木信光)も協力。五百城ら主催者と、この4人の子爵によって山草会が結成、団子坂で発会式が開かれる。

\*城数馬「日本野生鑑賞植物」『日本園



芸界雑誌』97号 1900.6/五百城文哉『野生植物陳列会』『日本園芸雑誌』121号 1902.6/五百城文哉『高山植物園の由来』『園芸界』1年3号 1904.12

山草会は1909～1910（明治 42～43）年頃まで続いた。

\* 牧野富太郎「本邦に於ける高山植物研究の歴史」『實際園芸臨時増刊』7巻 2号「高山植物：観察と栽培」号 1929.7  
5月、城数馬が五百城宅にて『日光名所図会』（石倉重雄著、博文館、同年10月刊）の「序」を執筆する。序文末尾に〈明治三十五年五月晃山萩垣面五百城君のこうサイカにて〉とある。

6月、『日本園芸雑誌』121号に、「野生植物陳列会」を寄稿する。前月の薫風園山草陳列会の内容を紹介。

7月21日、城数馬が長野県で採集した植物を、五百城の庭まで持ってくる。

\* 武田久吉『明治の山旅』創文社 1971  
9月、日光の山案内人・神山寅吉が、太郎山にて新種のランを発見。五百城がこれを写生、牧野富太郎が検分し、トラキチランと名づける。

\* 武田久吉「神山寅吉の語」『山岳』12年1号 1918.2.p.179

11月5日、東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園が日光町佛岩に開園。初代主任として、五百城の水戸時代の友人だった望月直義が就任する。

\* 五百城文哉「高山植物園の由来」『園芸界』1年3号 1904.12/寺門寿明「日光植物園の創設と三人の水戸藩士—五百城文哉、松村任三、中山信徴」『耕人』10号 2004.5.p.225/西村公宏「創設期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について」『ランドスケープ研究』78巻5号 2015.3  
植物園は1911（明治 44）年11月に、花石町の旧松平別邸敷地へ移転する。現・東京大学大学院理学系研究科附属植物園日光分園。

\* 西村公宏「拡充期の東京帝国大学附属植物園日光分園におけるロックガーデンの整備について」『ランドスケープ研究』79巻5号 2016.3  
12月10日、ロンドンのジャパソサエティにおいて、ジョン・ヘンリー・ディクソンによってもたらされた五百城の作品10点が、五姓田芳柳ら当時の日本を代表する画家たちの作品と共に展示公開される。

\* 出口保夫「漱石と不愉快なロンドン」柏書房 2006 p.261  
12月、高島北海へ七言律詩三首を添えた書簡を送る。  
\* 長池敏弘「高島得三の生涯とその事蹟（上・下）」『林業経済』294-295号 1973.4-5)

## 1903（明治 36）年 41歳／40歳

7月、五百城が口絵を描いた、前田曙山『園芸文庫』第1巻（春陽堂）が刊行となる。

8月15日、作家の丸山九華が来訪する。  
\* 礪川九華「白雲日記」『園芸界』1年1号 1904.10

8月19～26日、城数馬・青木信光らと白馬岳に登り植物採集を行なう。  
\* 青木信光談「忙中閑話」『園芸界』2年3号 1905.3/五百城文哉「白馬岳」『日本園芸雑誌』17巻9号 1905/五百城文哉「赤嶺の一角」『山岳』1巻1号 1906.4/中山琥一「五百城文哉と城数馬の日光」『日光近代学事始』随想舎 1997)

城数馬からの依頼により、この時の記念として水彩軸装の《御花畑》を描く。  
\* 軸装に、城によると思われる「亡友咬菜窩主人五百城文哉筆水彩信濃国白馬山御花畑より越中国立山遠望之図」との外題が記されている。寺門寿明「五百城文哉一人と作品一」『五百城文哉』水戸市立博物館 1983) p.60

9月13日、来日中のロシア人画家ヴァシーリー・ヴェレシチャーギンが、日光東照宮の許可を得て、この日から一ヶ月ほど、境内の撮影とスケッチを行なう。この間に五百城とも知り合う。

\* 小杉未醒「鬮籠塔の筆者」『陣中詩篇』嵩山房 1904 pp.65-67/山作良之「明治時代における日光東照宮の境内撮影」『全国東照宮連合会々報』45号 2011.12 p.36

9月26日、小杉未醒、隣寺の隆誠、山案内の三五郎が、日光の赤嶺山に登る。

\* 五百城文哉『山岳』1巻1号 1906.4/中山琥一「五百城文哉と城数馬の日光」『日光近代学事始』随想舎 1997)/小杉未醒「青葉若葉」『詩興画趣』彩雲閣 1907  
11月、五百城が口絵を描いた、前田曙山『園芸文庫』第5巻（春陽堂）が刊行となる。

この年、山草会が開かれる。  
\* 木下友三郎「園芸一夕話」『園芸界』1年1号 1904.10

## 1904（明治 37）年 42歳／41歳

9月、近事画報社の特派員として1月から日露戦争の戦地へ派遣されていた小杉放菴が帰還・帰郷し、訪ねてきたので、ヴェレスチャーギンが残っていたノートを見せる。

\* 小杉未醒「鬮籠塔の筆者」『陣中詩篇』嵩山房 1904 pp.65-67

9月23日、青木信光が新種の蘭を日光で発見。その後、10月15日に牧野が五百城宅に来訪、数日滞在。この間、16日に五百城と牧野がともに女峰山に登り、新種の蘭を確認。牧野によりアオキランとの和名を付けられる。

\* 小松みち「五百城文哉と牧野富太郎の交友—牧野文庫所蔵資料から見る—」(『晃嶺の百花譜—五百城文哉の植物画』小杉放菴記念日光美術館 2003)pp.29-32  
11月1～4日、英国人登山家ウォルター・ウェストンが日光の金谷ホテルに滞在する。

\* 寺門寿明「『高山植物図幅』倫敦探索行—五百城文哉とウォルター・ウェストン」『耕人』12号 2006.6

11月3日、牧野富太郎へ手紙を出す。内容は先月来訪時のお礼、牧野へ送った122種の植物の記入順序のことなど。  
\* 小松みち「五百城文哉と牧野富太郎の交友—牧野文庫所蔵資料から見る—」(『晃嶺の百花譜—五百城文哉の植物画』小杉放菴記念日光美術館 2003)pp.29-30  
12月、『園芸界』1年3号へ高山植物園の由来」を寄稿。いま現在 600種以上の植物が自邸庭にあること、始めたのは10余年前であることなど書く。

## 1905（明治 38）年 43歳／42歳

この年、『日本園芸雑誌』159号に、城数馬との連名で「白馬岳」を寄稿する。1903年の白馬岳の登山記。この年、『日本園芸雑誌』161号に、「秋の花」と題して文章と花の挿図を寄稿する。これに先立ち同誌には7回にわたり、城数馬らの文章に寄せて花や山草の挿図を掲載している。

\* 『五百城文哉』水戸市立博物館 1983 p.58

この年、『園芸界』誌の口絵に植物画を寄せる。  
5月31日、ウェストンによって英国に持ち帰られた五百城の作品（白馬岳高山植物図幅）、英国山岳会の展覧会に出品展示される。

\* 『ジャーナル』No.169,1905.8/『山岳』1年1号 1906.4 p.145

4月20日、武田久吉へ採集した草花についての葉書を送る。

\* 横浜開港資料館蔵/「武田家旧蔵アーネスト・サトウ関係資料(3)」『横浜開港資料館紀要』24号 2006.3 p.10/『NIKKO 国際観光都市・日光の成立—』栃木県立博物館 2016 p.70

7月、日光町鉢石に、新・古の美術品を陳列する日光美術館が開設される。

\* 『美術新報』4巻7号 1905.7 p.6/『美術新報』4巻15号 1905.11 p.6

7月、春陽堂から『山草絵葉書』10種を販売する。広告が『東京朝日新聞』1905.8.9 朝刊、『明星』9月号、『新公

論』9月号などに掲載される。  
10月8日消印、日光から牧野富太郎へ手紙を出す。牧野へ送った腊葉などが住所不明で届いていないらしいことを詫言、城数馬が那須の黒田原で採集してきたハクサンフクロに似た植物について尋ねる。

\* 松岡司「牧野富太郎通信」トンゴ出版 2017 pp.79-81

10月から東京に滞在する。  
\* 寺門寿明編「五百城文哉略年譜」(『五百城文哉展』東京ステーションギャラリー—2005) p.197

10月14日、山岳会（現・日本山岳会）設立。城数馬・武田久吉・小島烏水らが参加する。

\* 武田久吉「日本山岳会の創立と小島烏水君」『山岳』44年1号 1949.4  
年末、箱根、熱海、沼津などに転地療養する。この頃、脳神経の病に冒されていた。

\* 『五百城文哉氏訃報』『美術新報』5巻6号 1906.6 p.7

## 1906（明治 39）年 44歳

1月、正月を静岡沼津町牛臥の植村別荘で迎える。小杉放菴も同行か。

\* 『五百城文哉氏訃報』『美術新報』5巻6号 1906.6 p.7/1906年1月1日付五百城文哉宛城数馬年賀状（当館寄託）/1906年1月1日付小杉未醒宛高村眞夫葉書（当館蔵）

2月5日発行、『美術新報』4巻22号 p.7で〈五百城沼津に転地療養、4月頃出京して、未醒宅に滞在予定〉と報じられる。

4月、山岳会の機関誌『山岳』第1年第1号に「赤嶺の一角」を寄稿する。これは小杉放菴らも同行した 1903年の赤嶺山登山記で、小杉が挿図を添えている。

4月、病が一時快方に向かったため日光に戻ることにし、途中東京の小杉放菴宅に寄るが再び病状が悪化したため、ここに50日間滞在する。

\* 小杉未醒「青葉若葉」『詩興画趣』彩雲閣 1907

5月25日、妻や小杉放菴のほか、五百城の山草趣味の友人でもある高橋国手医学士に付き添われ、日光へ帰る。  
\* 小杉未醒「青葉若葉」『詩興画趣』彩雲閣 1907

5月28日、小杉未醒・城数馬・高橋国手・山案内の三五郎が、女峰山に登る。  
\* 小杉未醒「青葉若葉」『詩興画趣』彩雲閣 1907

6月6日、日光の自宅にて、脳神経の病により逝去する。

\* 「日光山の奇人」『報知新聞』1906.6.12 p.3など、命日を7日とする記事が多いが、墓石背面には6日と刻まれている。萩垣面の自宅近くの墓に葬られる。戒名は「光徳院五百城文哉清居士霊」。文哉没後、みつは夫婦養子となり、五百城家を継がせる。みつ自身は、東京へ移り、一時実家のある常陸太田に身を寄せた後、現在の仙台市郊外で亡くなる。彼女とは、小杉放菴はずっと付きあいが続いた。

\* 木村莊八「小杉放菴」『三彩』3号 1946.11 p.33

## 1911（明治 44）年

5月7日、日本山岳会第四大会（東京府教育会々館）に、五百城の《白馬山中群芳放芳》が、久留島通簡子爵より出品される。

\* 『山岳』6年2号 1911.7 pp.146-160/現在、『百花百草図』の作品名で栃木県立美術館蔵。

## 1916（大正 5）年

7月、流行会主催「山と水展覧会」（5～20日、三越旧館）に、『日光の高山植物』が松村任三より出品される。

\* 『三越』16巻7号 1916.7 pp.6-7/現在、

《晃嶺群芳之図》の作品名で水戸市立博物館蔵

## 1925（大正 14）年

4月、第1回常総洋画展覧会（水戸市、茨城県公会堂）に、五百城文哉の遺作12点が出品される。このうち小杉放菴が持っていた《袋田の滝》が茨城県へ寄贈される。

\* 寺門寿明「五百城文哉の久慈郡遊歴」（『常陸の社会と文化』ベリかん社 2007) p.332-335。なお同書は寄贈をこの年とし、『茨城の美と心』茨城新聞社 1982 p.162は1937年寄贈としている。

## 1927（昭和 2）年

6月、明治大正名作展覧会に、油彩画《藤田東湖像》が出品される。

\* 『明治大正名作展』第2輯 東京朝日新聞発行所 1927

## 1929（昭和 4）年

7月、『實際園芸臨時増刊』7巻2号「高山植物：観察と栽培」号口絵に、《高山植物群生図》（松村家蔵）が掲載される。

\* 現在、『晃嶺群芳之図』の作品名で水戸市立博物館蔵

## 1937（昭和 12）年

4月、明治大正昭和三聖代名作展に、《袋田の滝》が出品される。

\* 『明治・大正・昭和三聖代名作美術展目録』朝日新聞社 1937

## 1943（昭和 18）年

2月、明治美術名作大展示会に、木下孝則所蔵の油彩画《日光風景》が出品される。木下孝則は、木下友三郎の長男で洋画家。

\* 『明治美術名作集』朝日新聞社 1943



## 小杉放菴 略年譜

1881 (明治14)年 [辛巳] 0歳

12月29日、二荒山神社の神官であった小杉富三郎と妻・タエとの四男として、日光の山内で生まれる。本名は国太郎。

1884 (明治17)年 [甲申] 3歳

国府浜魯太郎の養子となる(正式な入籍は1886年5月)。

1887 (明治20)年 [丁亥] 6歳

2月、実父・小杉富三郎が二荒山神社を辞し、年内に日光御料監守長となる。

1892 (明治25)年 [壬辰] 11歳

6月、五百城文哉が大作制作のために日光を訪れ、そのまま永住する。

1893 (明治26)年 [癸巳] 12歳

6月、小杉富三郎が日光町の2代目町長となる(～1897年2月まで)。この頃、富三郎に連れられ、五百城文哉と出会う。以後、五百城のもとに通いながら洋画を学ぶ。

1896 (明治29)年 [丙申] 15歳

3月、栃木県尋常中学校を退学する。5月、五百城文哉の内弟子になる(～1898年まで)。

1897 (明治30)年 [丁酉] 16歳

秋、日光に來た吉田博から刺激を受ける。

1898 (明治31)年 [戊戌] 17歳

8月、《昔語り》下絵制作のため、五百城文哉の紹介で興雲律院に滞在していた黒田清輝を知る。この頃、五百城文哉に無断で上京する。

1899 (明治32)年 [己亥] 18歳

この頃、白馬会の研究所に通うが、2日行っただけで止める。秋、一度帰郷して五百城に謝罪し、再上京する。10月、小山正太郎が主宰する画塾・不同舎に入る。同期に青木繁や荻原守衛らが入った。その後22歳頃まで東京と日光を往復し、日光で売った水彩画の代金で画材を買う生活を送る。

1900 (明治33)年 [庚子] 19歳

この頃から《未醒》と号する。

1901 (明治34)年 [辛丑] 20歳

5月、国府浜家から離籍し、小杉家に復籍する。

1902 (明治35)年 [壬寅] 21歳

太平洋画会の会員となる。翌年の第2回展から出品。

1903 (明治36)年 [癸卯] 22歳

小山正太郎の推薦で近事画報社に入る。この頃、田岡嶺雲・佐藤秋蘋・小川芋銭と出会い、親交を結ぶ。

1904 (明治37)年 [甲辰] 23歳

1月、報知新聞および近事画報社の特派員として朝鮮に派遣。じき近事画報社専属となる。2月から始まった日露戦争の様子を

『戦時画報』へ通信する。

9月、帰国。東京にいた姉弟と田端で暮らし始める。

11月、『陣中詩篇』を刊行する。

1905 (明治38)年 [乙巳] 24歳

9月、石井柏亭、川上邦基らと美術文芸雑誌『平旦』を創刊する。この頃、『近事画報』『新古文林』などの雑誌で、漫画家としても頭角を現わす。

1906 (明治39)年 [丙午] 25歳

6月、五百城文哉が日光の自宅で逝去。6月、国木田独歩の仲人で、日光町七里の相良樗吉の長女ハルと結納を取り交わす(婚姻届の提出は1908年1月)。

1907 (明治40)年 [丁未] 26歳

1月、『漫画一年』を刊行する。5月、美術雑誌『方寸』が創刊され、寄稿する(1908年から同人となる)。

1908 (明治41)年 [戊申] 27歳

6月4日、長男の一雄が誕生する。国木田独歩が名付け親となる。23日、独歩が逝去する。

1909 (明治42)年 [己酉] 28歳

押川春浪ら武俠社の人々と交遊する。天狗倶楽部を結成し、スポーツ試合を楽しむ。

1910 (明治43)年 [庚戌] 29歳

1月10日、長女の百合が誕生する。10月、第4回文展に油彩画《袖》を出品、三等賞を受賞する。

1911 (明治44)年 [辛亥] 30歳

10月、第5回文展に油彩画《水郷》を出品し、最高賞であった二等賞を受賞する。

1912 (明治45)年 [壬子] 31歳

5月、第12回无声会展に参加。日本画や焼絵の作品を出品する。

1913 (大正2)年 [癸丑] 32歳

フランスを中心に、ヨーロッパ各地を遊学する。

1914 (大正3)年 [甲寅] 33歳

3月、満谷国四郎、柚木久太と滞欧作品展を開く。7月、村山槐多がしばらく小杉家に居候する。9月、再興された日本美術院に同人として参加し、洋画部を牽引する。10月、文展から独立した二科会に審査員として参加する。

1915 (大正4)年 [乙卯] 34歳

3月25日、次男の二郎が誕生する。

1916 (大正5)年 [丙辰] 35歳

2月、初めて沖縄を旅行する。

1917 (大正6)年 [丁巳] 36歳

春、初めて中国を旅行する。10月、日本画による初個展を高島屋大阪心齋橋店で開催する。

1918 (大正7)年 [戊午] 37歳

田端の文化人たちとの親睦会「交換晩酌会」が始まり、芥川龍之介らと交友する(1922年から道閑会となる)。

1920 (大正9)年 [庚申] 39歳

9月、再興第7回院展の開催中、足立源一郎、倉田白羊、長谷川昇、森田恒友、山本鼎ら、洋画部同人全員で脱退する。

1922 (大正11)年 [壬戌] 41歳

1月、日本美術院脱退メンバーを中心に、春陽会を創立。リーダー格として晩年まで同会を牽引する。10月、中国旅行記念に、倉田白羊の雅号「放居士」から“放”の字をもらう。この頃、福井県の紙漉き師・岩野平三郎と親交が始まる。

1923 (大正12)年 [癸亥] 42歳

この頃から《放庵》の号を使い始め、日本画の制作が中心になっていく。

1925 (大正14)年 [乙丑] 44歳

東京大学安田講堂の壁画を描く。

1926 (大正15)年 [丙寅] 45歳

4月、室内社の西田武雄ら発起による、燕巢会の結成に参加する。5月、第1回聖徳太子奉讃美術展に出品する。

1927 (昭和2)年 [丁卯] 46歳

小杉の提唱により、漢学者の公田連太郎を中心とする漢籍勉強会「老荘会」が発足し、荘子や詩経などが講じられる。

4月27日、三男・三郎が誕生する。10月、芭蕉の足跡を慕い、岸浪静山(百草屋)と東北・北陸を旅行する。

1928 (昭和3)年 [戊辰] 47歳

1月、富山県八尾町を旅行する。これを機に越中おわら節の新歌詞として「八尾四季」を歌詞。これに振付がつけられ、「四季踊り」が完成する。

1929 (昭和4)年 [己巳] 48歳

4月、小堀鞆音、荒井寛方らと栃木県出身の日本画家有志による華嚴社を組織する。この年、明治神宮外苑聖徳記念絵画館の壁画《帝国議会議開院式臨御》を制作する。この頃、岩野平三郎製の麻紙を本格的に使い始める。のちに「放菴紙」と称される。

1932 (昭和7)年 [壬申] 51歳

1月、新潟県妙高高原の赤倉温泉に別荘が完成し、安明荘と名づける。2月、第1回六潮会展に招待出品する。11月、個展を三越本店で開催する。以後、同店でたびたび個展を開く。

1933 (昭和8)年 [癸酉] 52歳

摺見寺(滋賀県)のために襖絵の制作を始める。1944(昭和19)年までに5点の襖絵を納める。12月、初めての歌集『放菴歌集』を刊行する。この頃、《放庵》を《放菴》と署するようになる。

1935 (昭和10)年 [乙亥] 54歳

5月、帝国美術院の改組(松田改組)が行われ、帝国美術院会員となる。10月、京城で個展を開催する。

1937 (昭和12)年 [丁丑] 56歳

2月、小川芋銭、矢野橋村らと、墨人会倶楽部を結成する。6月、帝国美術院が帝国芸術院へ改組、会員となる。

1938 (昭和13)年 [戊寅] 57歳

11月6日、三男の三郎が逝去する。

1939 (昭和14)年 [己卯] 58歳

4月、ニューヨーク万国博覧会に油彩画《僧》を出品する。6月、第5回廻々会展に出品。以後、同会に参加。

1940 (昭和15)年 [庚辰] 59歳

4月、華中鉄道株式会社の招聘により、石井鶴三・田中青坪と共に、日中戦争の戦跡を取材する。12月、石井柏亭、木村莊八、藤田嗣治らと、日本画を描く洋画家の団体・邦画一如会を結成する。

1941 (昭和16)年 [辛巳] 60歳

7月、第2回聖戦美術展に審査員として戦線スケッチを出品する。

1944 (昭和19)年 [甲申] 63歳

2月、戦艦献納帝国芸術院会員美術展に油彩画《金太郎遊行》を出品する。10月、軍事援護美術展(日本美術報国会主催)に《山翁奉仕》を出品。のち日光小学校に寄贈する。

1945 (昭和20)年 [乙酉] 64歳

3月、安明荘に疎開。以後、この地で生活する。

1956 (昭和31)年 [丙申] 75歳

5月、青森県を旅行、桃川酒造を訪ねる。商標「桃川」の揮毫を頼まれ、翌年書きあげる。

1958 (昭和33)年 [戊戌] 77歳

11月、日光市名誉市民となる。11月、日本芸術院会員を辞任する。

1960 (昭和35)年 [庚子] 79歳

4月、画業60年展が、朝日新聞社の主催により日本橋高島屋で開催される。

1962 (昭和37)年 [壬寅] 81歳

1月、「小杉放菴 書展」を大阪なんば高島屋美術部画廊で開催する。

1964 (昭和39)年 [甲辰] 83歳

1月、「平櫛田中・熊谷守一・小杉放菴三合会展」を大阪なんば高島屋美術部画廊で開催する。4月16日、安明荘にて老衰により逝去。享年82。法名は「放菴居士」。

### 「五百城文哉生誕160年記念 文哉と放菴」展解説付出品目録

編集：迫内祐司(小杉放菴記念日光美術館学芸員)

発行：小杉放菴記念日光美術館

初版発行：2023年12月2日

※当館ホームページにてカラー版PDFを公開しています。

